

國家主義時代はインフレ時代なり

「國家主義の如きものは、その實、インフレーション政策に他ならぬ」と云ふことを筆者は考へて居したが、「If inflation comes」(インフレ来りなば)と云ふ著書の中で、筆者と、同商賣のバブソン氏(Roger. W. Babson)は、「ルーズヴェルトの管理政策は、政府の財政を薄弱ならしめるもので、インフレなしで、果して、納税者S」(Could the Administration continue to carry out indefinitely its promises of aid all groups without resorting to the printing presses?)とあるのを見た。財政と信用を膨脹せしめて、不生産的大消費をやれば、早晚、インフレになることは否定し得ないことである。

インフレ反動来らず

昭和七・八年のインフレは、決して、インフレではなかつた。インフレーションになるかも知れぬ、と云ふので、金から物へをやつて、さわいだけである。財政も膨脹して居らず、不生産的消費も大して起つて居らず、従て、インフレーションもなかつたのである。従て、インフレ見越の失望で、昭和八・九年から大反動時代に入つたのであるが、今回は、既に、財政と信用の膨脹から見ても、不生産的大消費の進行から見ても、「不足現象」(shortage)から見ても、インフレが起りつゝあるのではな

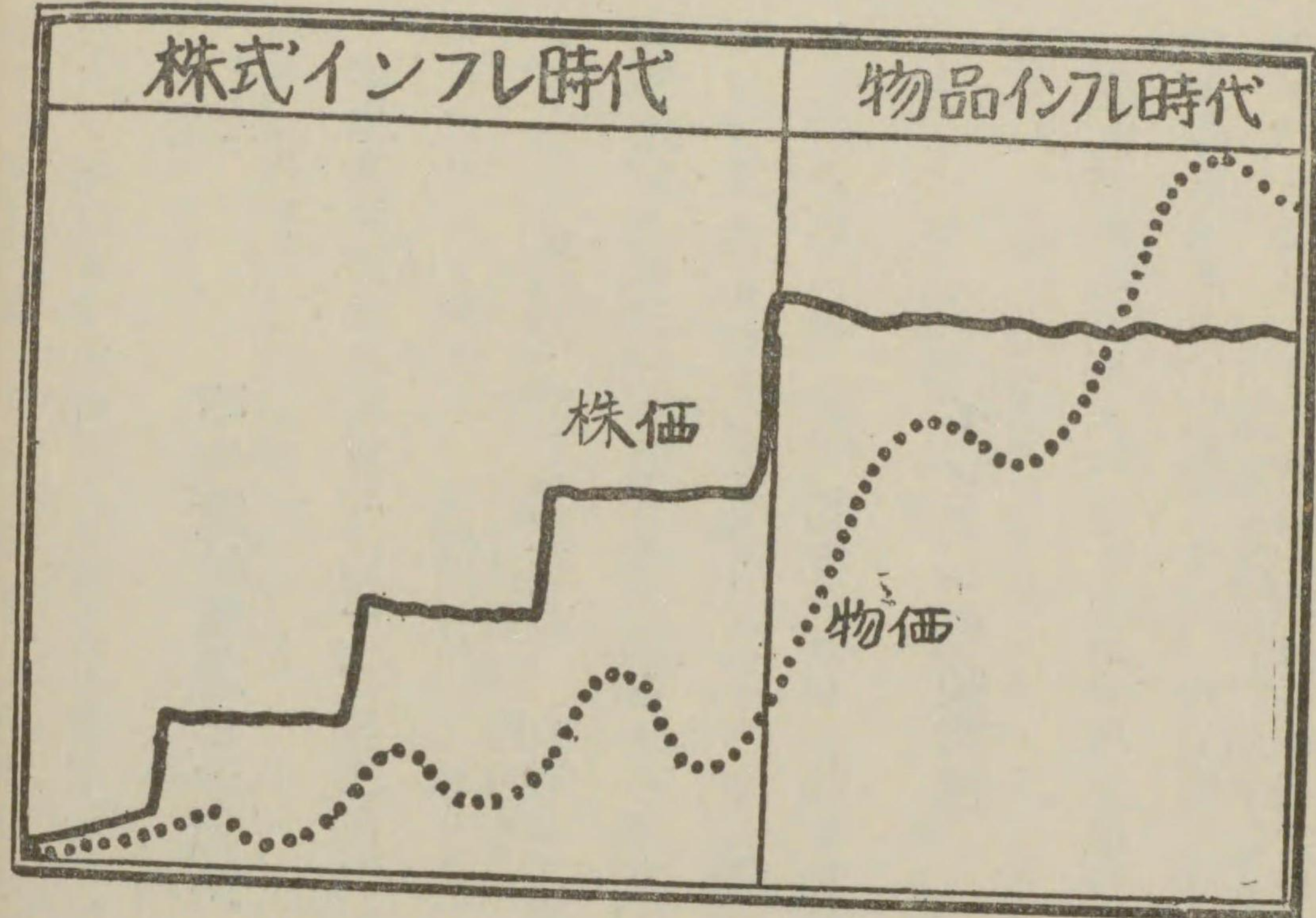
いか。従て、インフレの原因たる財政膨脹と、不生産的大消費とが拒否されぬ限りは、インフレは、益々、進行するもの、と見ざるを得ないのである。従て、インフレ反動なんか考へられない。

不生産的消費とは何か

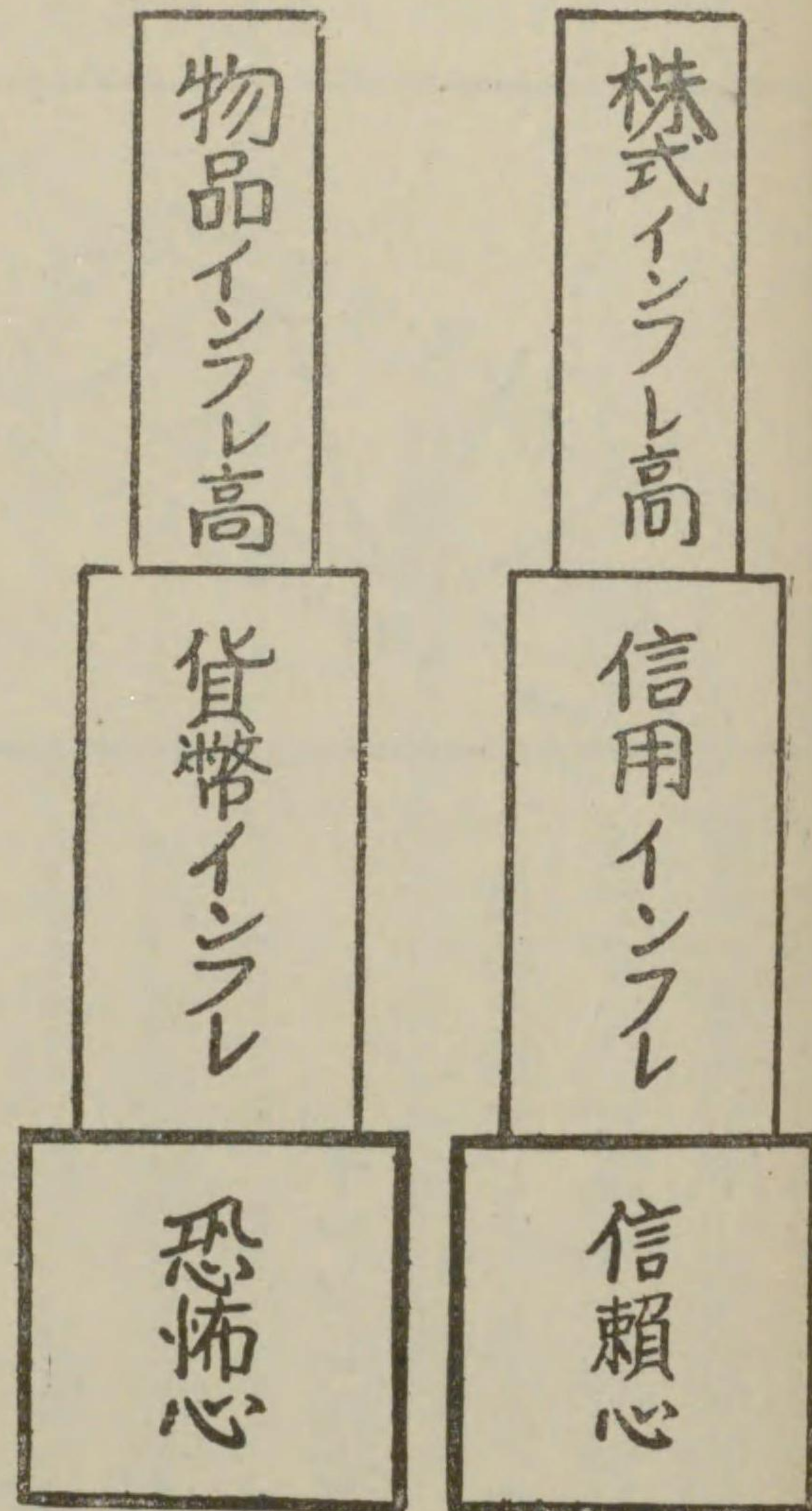
不生産的消費とは何か。(一)、再生産性がないか、(二)、不経済性に富むかの場合である。×××××、××××××××、原價の高い工場を作るが如きは、皆、不生産的消費となる。アルミ工場や、スチール工場や、飛行機工場や、自動車工場の最近の建設は、コストの甚だ高い製品しか作れぬ工場だから、不経済性と反民衆性の點から見ても、不生産的消費となる。その證據には、軍部の消費がストツプすると、誰れも、高いスチール、高いアルミ、高い自動車、高い飛行機の買手がなくなるからして、それらは、不経済性と反民衆性を曝露して、恐慌化するに相違ないのである。

インフレの必然性

「故に、××××××そのものが、再生産性なき點からして、不生産的消費であるのみならず、最近の日本の重工業や、化学工業や、精工業やは、不経済性と反民衆性との故を以て、一つの不生産的消費なり、と云へよう。斯る不生産的消費を敢てやつて居ると、遂には、國民貯蓄量が漸減して行く。そ



これは、毎日、遊んでばかり居ると、資産が食ひ減らされるに似たるものがある。藝者遊びばかりやつて居ると、遂には、借金をしなければならなくなり、次いで、借金で首が廻らなくなり、不如意勝ちになり、手形の信用が下落するだらう。之は、個人の場合だが、國家の場合にしても同様だ。國家が國民の爲めでなく、國家自體の爲めのみ、×××に消費し、工場建設を刺戟するならば、遂には、國民貯蓄の減少、さては、不足からして、公債を發行しても、賣りにくくなり、日銀が短期手形を出してまでも、資金を調達せねばならなくなる。物資は不足し、一般民衆としても、物價高やコスト高や増税やの割合に、収入が少いから、これまた、不如意、不足を來す。斯くて、不足の傾向が、政府の財政上に於ても、物の側に於ても、民衆の懐合に於ても、激化すると、茲に、インフレの第一歩は踏み出される。それを、そのま



まに進行せしめると、遂には、不足が爆發して、通貨不安となり、悪性インフレとなる。さうなると、貨幣價値の切下げを必要とするのであつて、物價は騰つた切り、下つて來ないことになる、フランスの場合を見ると、好く分る。即ち、左の如くであつて、

一九一三年(インフレ以前)	生活費	一〇〇	物價	一〇〇	株價	一〇〇	公債	一〇〇
一九二九年(インフレ最盛期)	六〇四	一〇〇	五〇七	一〇〇	五〇七	一〇〇	五七	
一九三二年(インフレ整理期)	五七二	二四六	二四六	二四六	八五			

インフレの結果として、物や株は騰つた切りになる。

株式インフレ時代

今日は、株式インフレ高時代である。之が、一順すると、次は、物のインフレ高時代となるであら

果してインフレ來るか

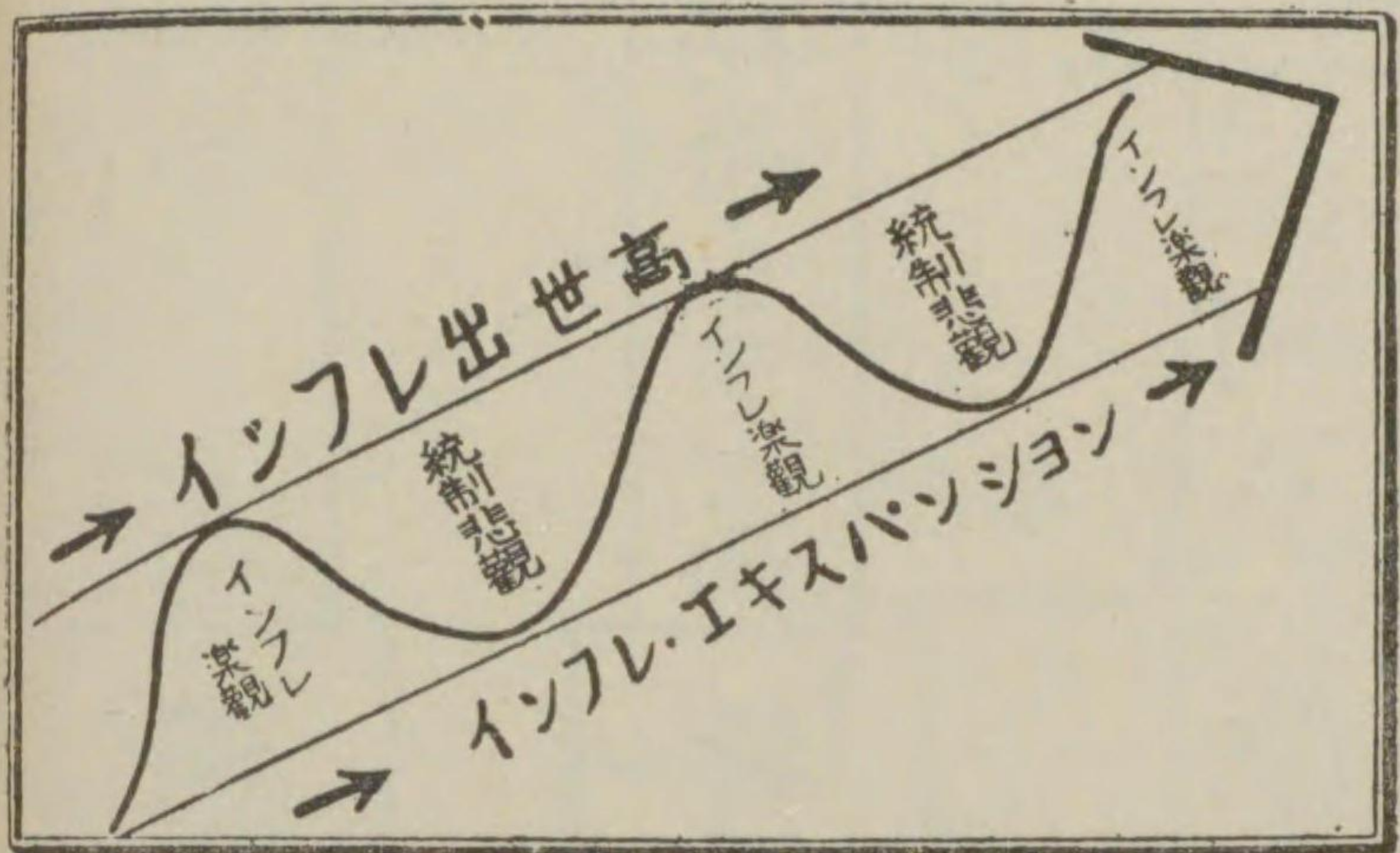
ら。インフレは、常に、株式インフレとして始まり、夫が一順すると、物品インフレとなるものだからだ。従て、之を表記して示せば、前頁右掲の如くなるであらう。以上の如く、株式インフレが先づ進行して、夫が、天井に達し、株價は、天井保合を續ける時分からして、初めて、物品インフレ高を來すのである。この物品インフレは、概して、恐怖心の結果である。株式インフレは、信頼心の結果であるが、物品インフレは恐怖心の結果である。即ち上掲の如し。

今日は、まだ、信頼心 (Confidence) に依る、信用インフン (Credit in Action) の状態であるから、株式のエキスパンション高、出世高の時代と見られる。信頼心が恐怖心に變る頃からして、初めて、吾々は、株式を賣つて、物品に乗替へて然るべきである。

インフレ相場の波瀾型

操業を緩和して、綿糸の市價を引下げた處で、物價の大勢には影響がない。問題は、米の如き食料品の價格の引下であり、重工業關係品の價格引下げであるが、統制をすると、却つて、斯うしたモノの價格は、反騰するばかりで、肝心の生産力擴充も出來なくなる。

インフレ進行期株價型



従て、統制を効果的なものとして考へて、統制悲觀をして、賣るのは愚である。却つて、そこは、悪目買ひ一貫で行くべきのみ。インフレ時代には、インフレ樂觀と統制悲觀とで、株價は波瀾を示しつゝ、結局に於ては、インフレ高を示すことは、更に、一考を要する處だ。前頁表を見よ。

軍縮成立よりもインフレ景氣の進行

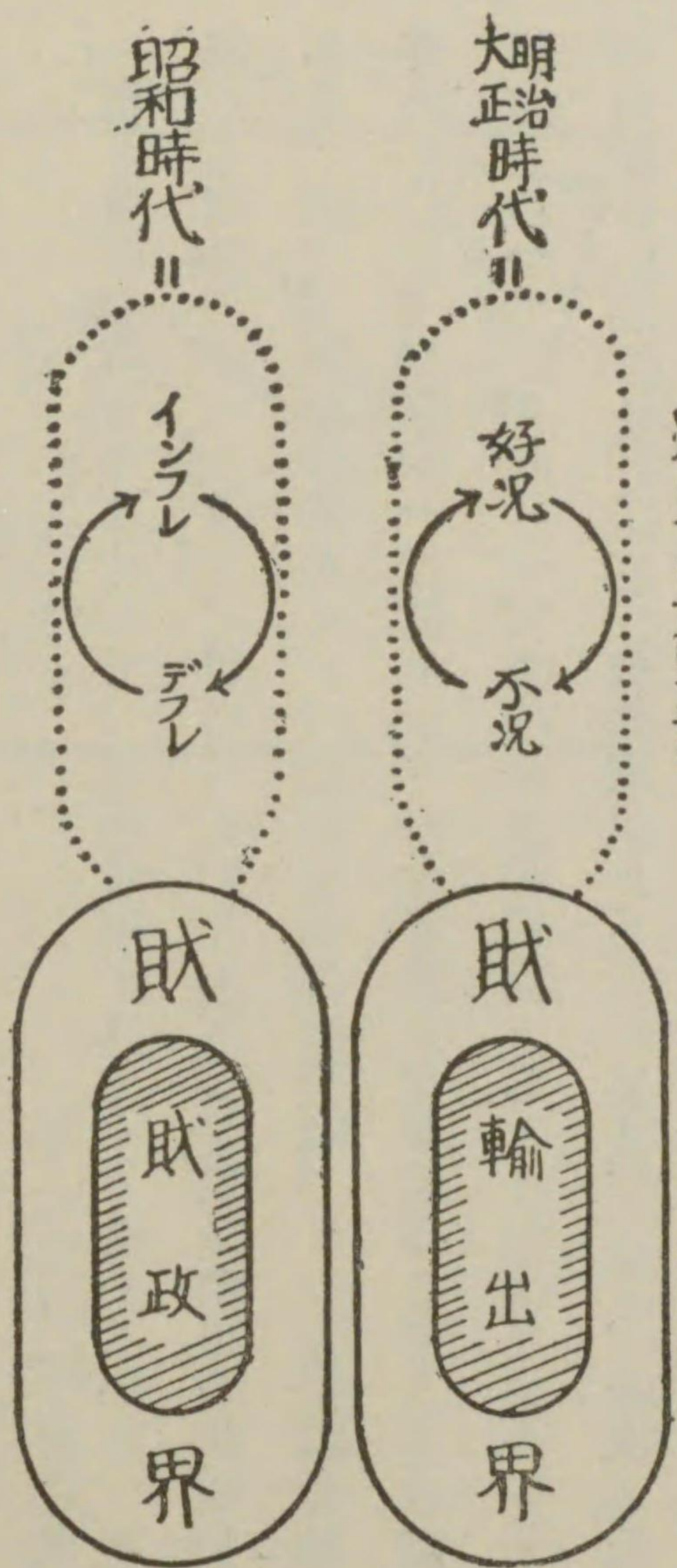
富と資源の再分布なくして、軍縮會議が成立する筈がないし、平和軍縮となると、差當つて、獨裁國たる獨逸のヒットラー、伊のムツソリーニは、獨裁政治の動搖を見るに至るは、火を賭る如く明である。従て、軍縮會議なんか、成立する筈はない。よしんば軍縮會議が成立したとしても、それは、英國として、五箇年十五億ポンドの大軍擴を放棄すると云ふ意味ではなく、英國の十五億ポンドの大軍擴を以つて、今回の大軍擴の最後の目標としようではないかと云ふ意味であらう。従て、(一)、技術關係から見ても、(二)、對露關係から云つても、(三)、滿洲・北支の新領土を獲得せる點から見ても、日本の軍擴は、まだく、三・四年間は、絶對的に持續するものと見る外あるまい。従て、インフレ景氣の進行は、必至である。

財界支配力の變化

明治・大正時代と、昭和時代とでは、財界支配力が一變して居る。明治・大正時代の財界支配力は貿易であつて、輸出貿易が盛になれば、財界は好景となり、輸入貿易が激増すれば、財界は不景氣となつたのであるが、昭和時代の財界支配力は財政であつて、財政が膨脹すれば、財界はインフレ化

財界変動型

財界支配力



し、財政が収縮すれば、財界はデフレ化すに至つたのである。即ち、財界支配力は、輸出から財政に變り、財界變動も、好景氣・不景氣の自然の循環から、インフレ・デフレの人爲交代となるに至つた。従て、之を表記して示せば、上の如くである。

再軍備運動の持続性如何

従て、財界のインフレ傾向が、依然として、持續するものかどうかは、日本の財政が、依然として膨脹情勢を續けるかどうかで決定されるであらう。然らば、日本の財政は、依然、膨脹情勢を續けるかどうか。之は、一に、全く、再軍備運動の如何に依る。然らば、この點は、どうか。人に依ると、平和會議なり、軍縮會議なりで、愈々、再軍備運動も、頂點を打つた、と見られるけれども、夫は、一大誤見である。蓋し、今回の平和軍縮會議なるものは、英國の十五億ポンドと云ふ巨大なる再軍備のレベルまでは、各國共に、進んで行つて良いが、それ以上の再軍備は、見合せようではないか、と云ふ提案であつて、即ち、再軍備の「最上限」(Upper limit)を劃するものだからである。而も、この「最上限界」たるや、今日の軍備レベルから見ても、非常に高いものである。殊に、一流國との比較から見ても、滿洲・北支に戦線の大延長された點から見ても、軍備レベルの甚だ立後れとなつて居る日本に於てをやである。従て、日本は、平和軍縮會議が成立すれば、却つて大急ぎでそのレベルまでは再軍備を強化しなければならぬ建前にある、と云へよう。だから、平和軍縮會議で、日本の再軍備運動が頂點に達した、と見て、日本の財政膨脹の一段落、さては、インフレの天井打ちを考へたらば、一大誤見、となるのである。況んや、平和軍縮會議なんか、仲々、成立しないに於てをやだ。

金持喧嘩せず

平和軍縮會議は、金持國の提案では駄目だ。貧乏國の提案でなくては。然るに、今日の夫れは、全く以つて、金持國の提案ではないか。従て、斯る平和軍縮會議の成立する筈はないのである。最近、

果してインフレ来るか

英國の一新聞記者が、「赤字國」(The Red Countries)と云ふ本を書いて居る。日本、獨逸、伊大利、スペイン等を、それに含ましめ、米國、英國、ロシアを、黒字國と見て、今日の世界情勢は、「赤字國對黒字國」(Red Countries against Black Countries)の對立で、決定される、と云つて居るのである。平和軍縮會議にしても、赤字國の提案でなければモノにならない、と云つて居るのである。この點から見ても、赤字國が、平和軍縮を嫌つて居る今日としては、平和軍縮會議の成立は、極めて、困難なことが分るであらう。「金持喧嘩せず」(Rich man always smiles against conflict)で、黒字國は、平和がお好きであるが、世界の大勢を決定するものは、實に、赤字國でなければならぬ。社會生活に於て、赤字の大衆が、黒字の上層階級を、支配するが如くである。

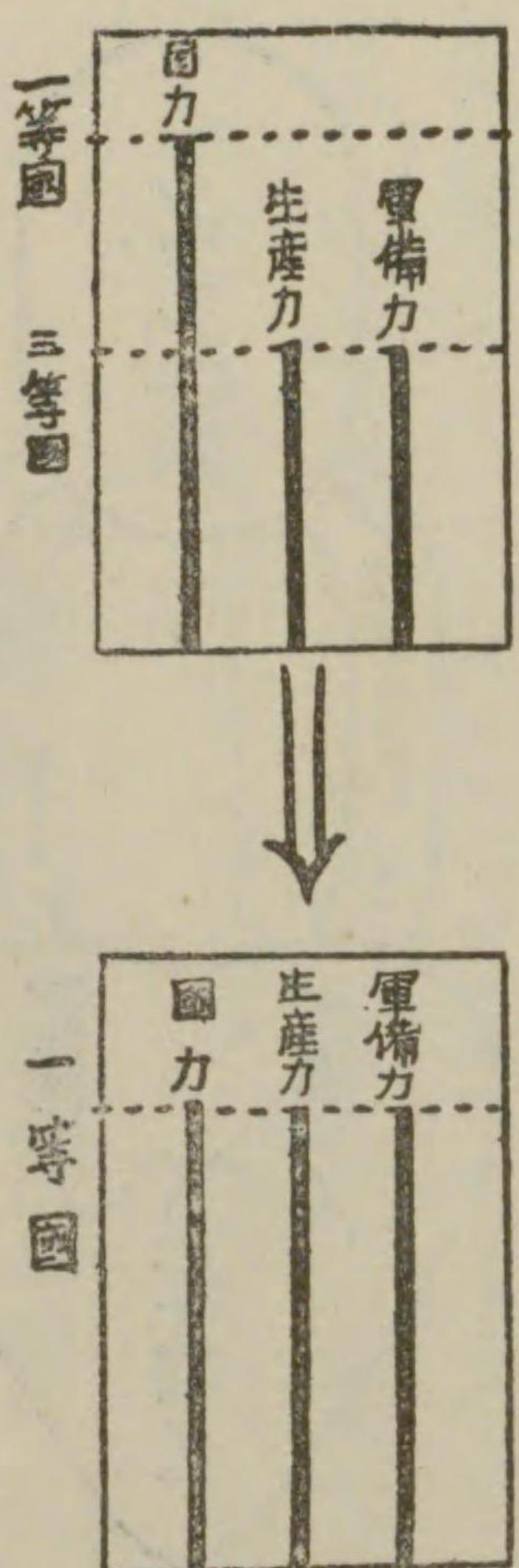
財政膨脹の必然性

何れにしても、これからは、軍備力と、從て、生産力とが、一等國でないことには、一等國になつては居られぬ時勢なのであるから、日本の如く、氣位ばかり一等國であつて、生産力や軍備力が、三等國である様な國では、再軍備の運動と生産力の擴充とが、急がれるのは、當然事でないか。戦争してもしないでも、世界對立時代であり、殊に、滿洲・北支を奪つた以上は、戦争をする氣で、十分の用意をしなければなるまい。再軍備を一等國のレベル迄押上げることは、今日では、一つの國家保

險なのである。戦争を抜きにして考へたつて、既に、自給自足を主とするブロック經濟の今日としては、生産力が國力の第一線とならざるを得ないから、生産力が第一等國でない限り、その國は、第一等國だ、とは云へないであらう。自由經濟の時代には、生産力が三等國でも、意張つて、一等國で居られるであらうが、今日の如き自給經濟の下では、生産力が一等國でない、一等國たるを得ないのである。一等國の資格は、軍備力と生産力とで測られねばならぬ時代とはなつたのである。之を表記せば上の如くであつて、この一點から見ても、軍備力と生産力とに大いに立後れて居る日本が、再軍備運動と生産力擴充とに、大努力せねばならぬことが分らう。從て、また、財政膨脹と財界インフレーションの必至も、推定される譯である。

自由經濟時代 ↓ 自給經濟時代

平和時代 ↓ 世界戰國時代

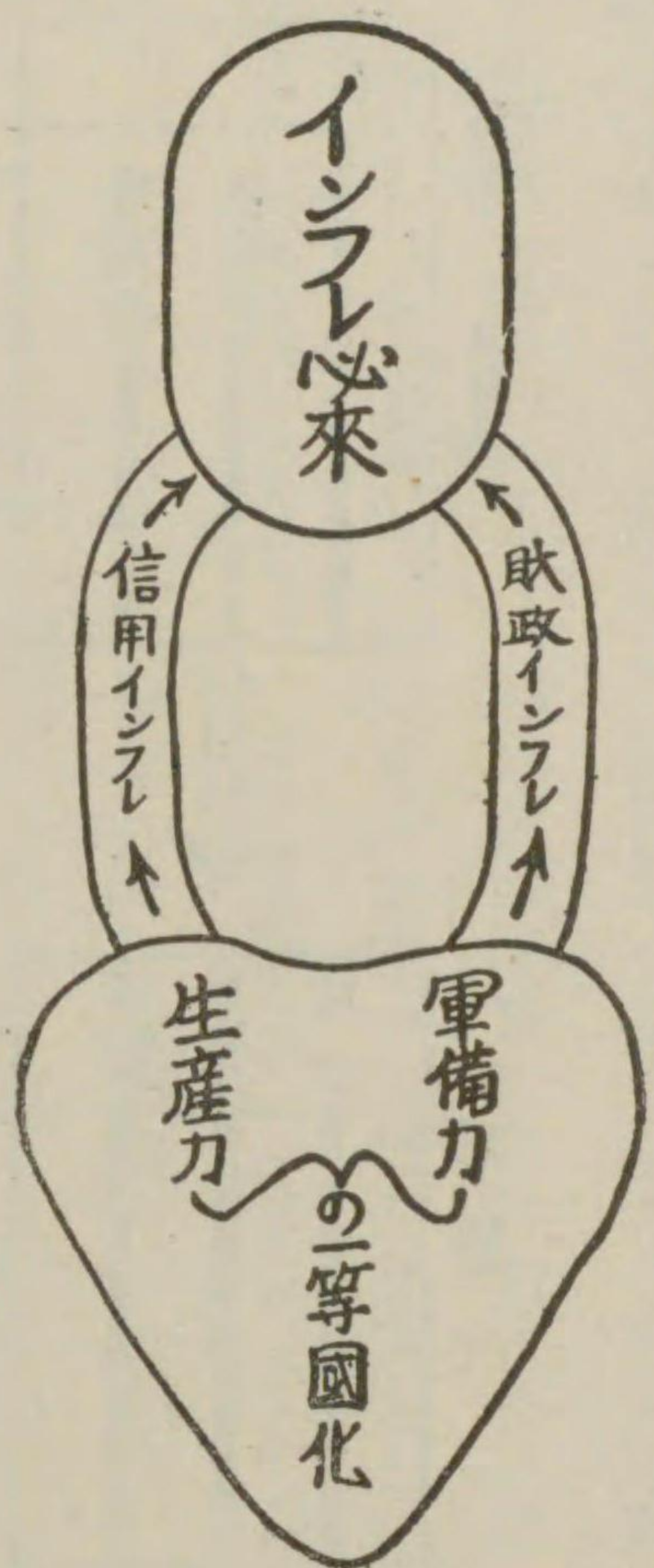


✓インフレーションの必然性

戦争の有無は、既に、問題ではないのである。問題は、寧ろ、一等國たる爲めの、戦争保険として

果してインフレーション来るか

の、諸準備である。今迄は、軍備と生産力とが三等國である所の一等國なるものが許されたのだが、今日では、全く、夫れが許されなくなつた。茲に、日本としての財政大膨脹の必然性がある。今迄は



「軍備と生産力との三等級である一等國」が許されたのに、夫れが、急に、不許可となつた。そこで、大至急に、軍備と生産力とをば、三等級から一等級にまで仕上げねばならぬ。その爲めには、民間としては、一大信用膨脹をやらねばならず、政府としては、一大財政膨脹をやらねばならぬ。茲に、インフレの必然性があるのである。従て、之を表記して示せば、右の如くなるであらう。

物價統制の効果如何

問題は、統制である。統制に依つて、インフレが抑制され得るかどうかであるが、インフレは、決して、統制されない。インフレを統制せんとせば、インフレの原因を一掃して、インフレを阻止する外ないのである。インフレの原因たる、(一)、不生産的大消費と、(二)、不生産力の擴大とを、財政

と信用の膨脹とで作出しながら、インフレそのものを抑制しようとしても、それは、全く、出来ない相談である。現に、物價騰貴の抑制にしても、さうではないか。急激な大消費で、原料不足、原價昂騰を刺戟しながら、物價を抑制しようたつて、それは、出来ない相談であるからして、勢ひ、物價の抑制策は、消費の節約か、生産力の擴大にならざるを得ないのである。然るに、消費の節約がスラスタと出来る位ならば、初めから、物價抑制の必要もないのである。再軍備と生産力擴充の爲めに、消費は増大するばかりで、節約なんか、殆ど、絶望的だからこそ、物價抑制が云々されるのである。従て、物價抑制の聲は、一種の悲鳴に過ぎない。悲鳴は、弱音であり、泣きごとである。従て、物價抑制に驚くのは、未だ見ぬお化けに驚くやうなものだ。インフレが進行するにつれて、物價抑制の聲は高くなるだらう。然し、それは、インフレの進行を物語るものであつて、決して、物價抑制の可能や、インフレ阻止の可能やを物語るものではない。

統制はインフレ斷行の手段

然らば、統制は、そも／＼如何なる職能を演ずるものであるか。精々、物價の騰貴、インフレの進をば、圓滑に長期化する所のものである。否定作用でなくて、調節作用である。乍然、これは、今回の統制の主たる作用ではない、副的作用である。主たる作用は、個人本位の資本主義を、國家本位の

資本主義にまで、改造する作用に他ならない。他言すれば、資本主義を國家本位化する所の國家力の現れである。國民本位から國家本位への止揚こそは、今回の統制の一大作用である。蓋し、斯る統制作用に依つて、國家力の強化を計らねば、「××と生産力の急激なる一等國化」と云ふ無理が利かぬからだ。他言すれば、インフレが出来ぬからだ。統制は、インフレ斷行の爲め的手段に過ぎない。インフレの統制ではない。インフレに對する統制でなくして、インフレの爲めの統制である。バブソン氏の如きも「Administration for inflation」（インフレの爲めの管理）であつて、「Administration against inflation」（インフレに對する管理）ではないと云つて居るが、至極、同感である。

インフレは環境の産物

インフレは、環境の産物である、時代の産物である。環境と時代がインフレを必要とする際には、インフレは起るのである。××と生産力の急激なる準備擴充をば、國際情勢が必要とする限りに於ては、インフレも、必至となる外あるまい。ジョン・ロー John Law は、土地を擔保とする土地貨幣 Land Money を發行して、一大インフレを誘發したのであるが、然し、それは、ジョン・ローのやつたことと云ふよりは、寧ろ、時代のやつたことだ、とも云へようか。時代が、ジョン・ローをして、土地貨幣を發行せしめたのではないか。所謂「産業革命」の爲めに、通貨の供給は、大不足を告げ、

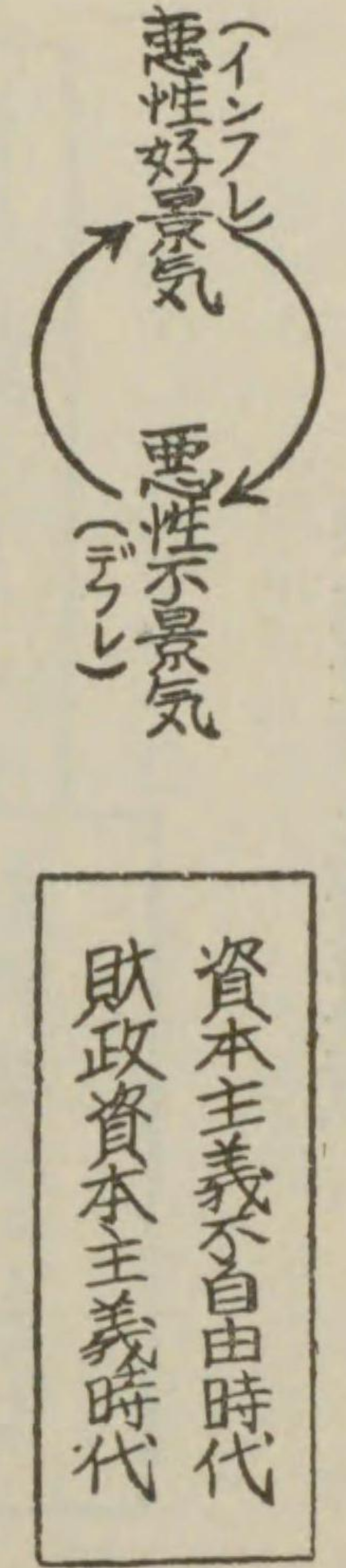
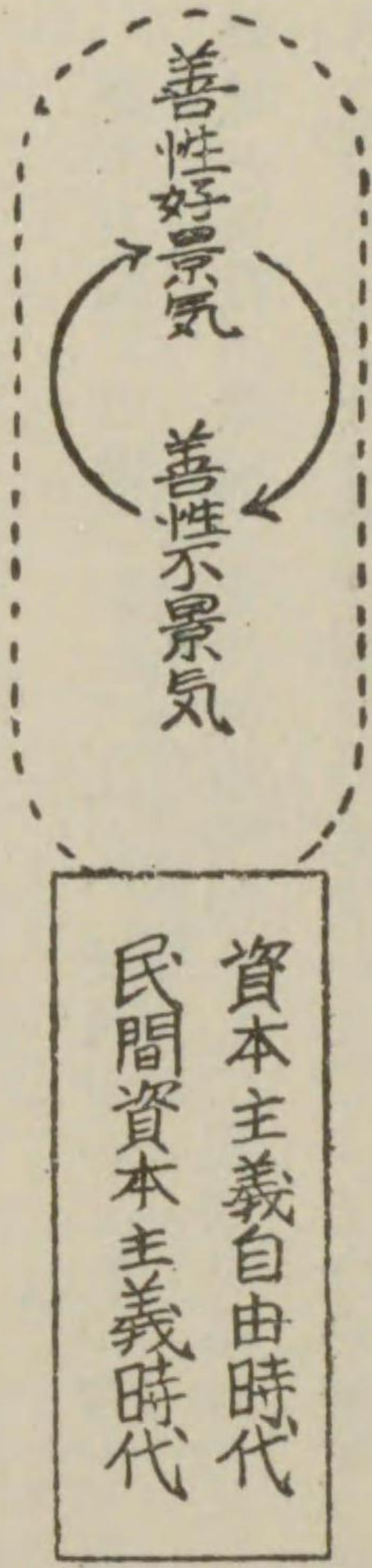
而も、産業革命に依る原價の低下で、物價は、下落の一路を辿つたのである。そこに、一七〇〇年代のインフレの必要があつたのだ。ジョン・ローは、それを、鋭敏に感じて、反映したに過ぎない。今日の世界情勢から云つても、民間消費の不足をば、國家消費が補足しなければならぬ情勢にあるが故に、この一點から見ても、インフレは必要とされつゝあることがわかる。蓋し、國家消費の擴大は、(一)、好況の維持から見ても、(二)、自給時代への適應から見ても、(三)、恐慌を防止する點から見ても、必至必然、且つ、必要なものであるからだ。インフレとは、一局部の爲めに、他の總てを犠牲にして、大消費をするその結果であるからして、國家消費ほど、インフレを起し易いものはないのである。

環境の變化と景氣の變化

景氣も環境の支配を蒙るものである。従て、環境が變れば、景氣の性質も、形態も、變つて來るものだ。然らば、景氣を支配する所の環境は、何か。資本主義これである。従て、資本主義の性質が變化するにつれて、景氣の性質も變

景氣
||その性質||

資本主義
||その性質||

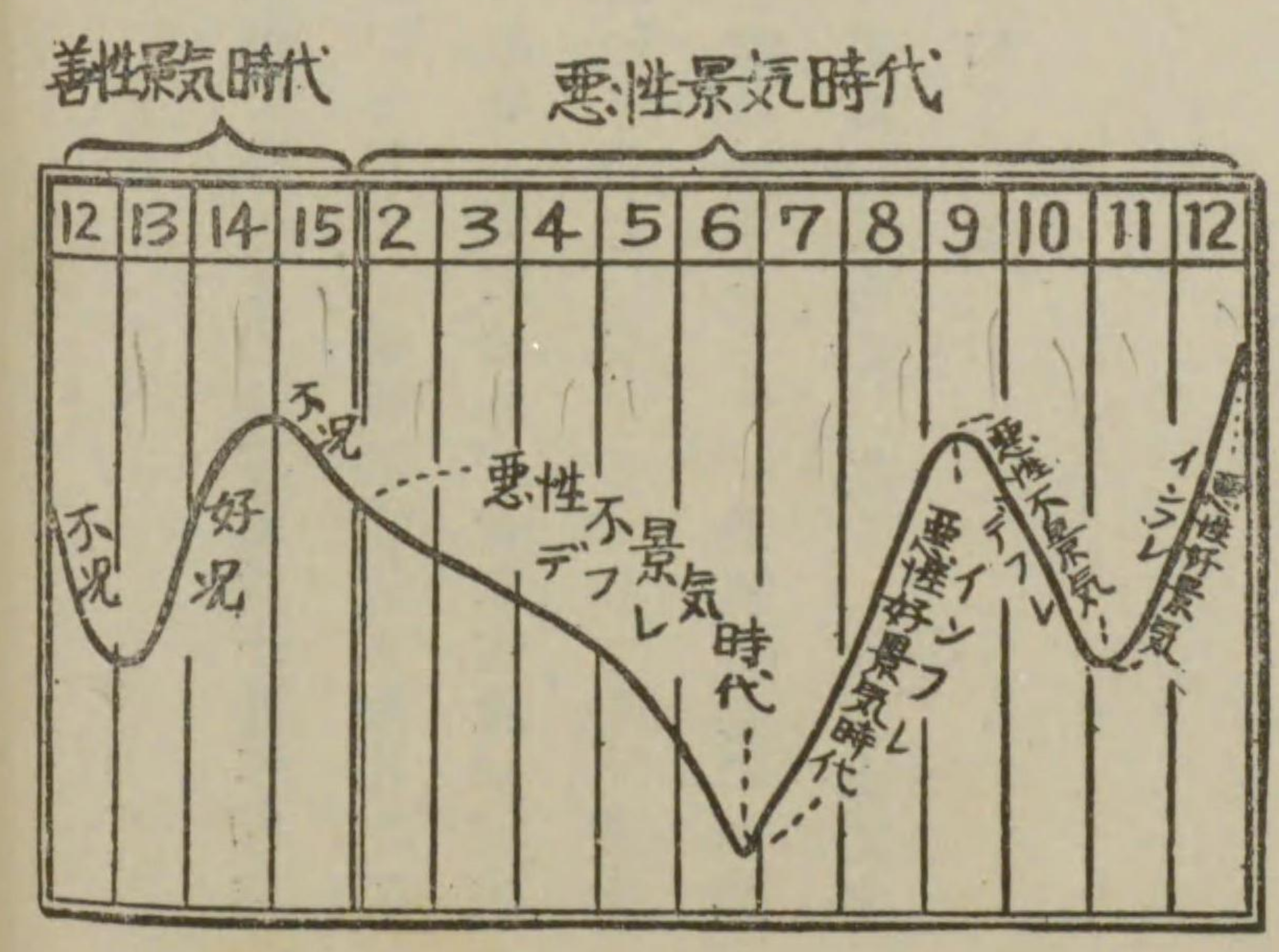


悪性不景気時代、即ちデフレ時代となり、昭和七・八・九年は悪性好景気時代、即ちインフレ時代となつたのであるが、昭和九・十・十一年と、再び、悪性不景気時代、即ちデフレ時代と化し、最近、再び、悪性好景気時代、即ち、インフレ時代に轉化しつつある。従て、之を表記して示せば、下の如くなるであらう。

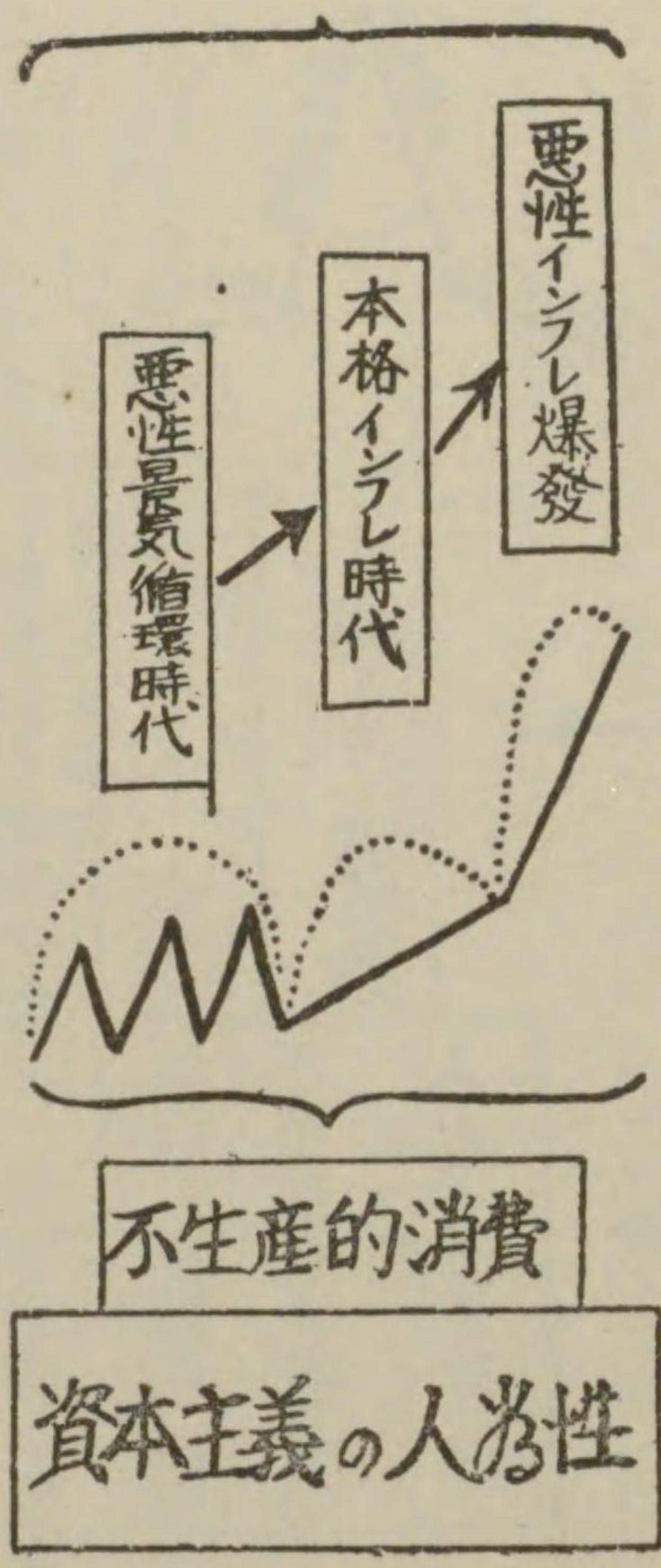
▼ **本格インフレと悪性インフレの原因**

所謂「インフレ」と云ふのは、悪性好景気を指すのであつて、本

「インフレ」と云ふのは、悪性好景気のことであり、所謂「デフレーション」と云ふのは、悪性不景気のことである。日本では、昭和二年頃から昭和六年にかけて、



格的のインフレと異なる。「悪性好景気」、即ち「所謂インフレ」は、資本主義が自由性と民間性とを失つて、人為的になつた結果であるが、「本格インフレ」は、資本主義が不生産的消費を中心として動くに至つて、初て、發生する所の現象である。而も、本格インフレとなるや、悪性インフレにならぬ限りは、本格デフレにもならぬ。即ち、本格インフレは、本格デフレと、循環變動をしないのである。本格インフレは、不生産的消費が、益々大規模に進めらるゝ限り、遂には、悪性インフレに、俄然一變するものである。その結果として、通貨の大整理をやらねばならなくなる。通貨大整理の後には本格悪性デフレを來すであらう。それも全く不生産的消費の結果である。故に、不生産的消費の加はらざる限りは、悪性好景気と悪性不景気の交代循環を示すも、不生産的消費が資本主義の人爲性に加はるにつれて、悪性景気循環時代は、本格

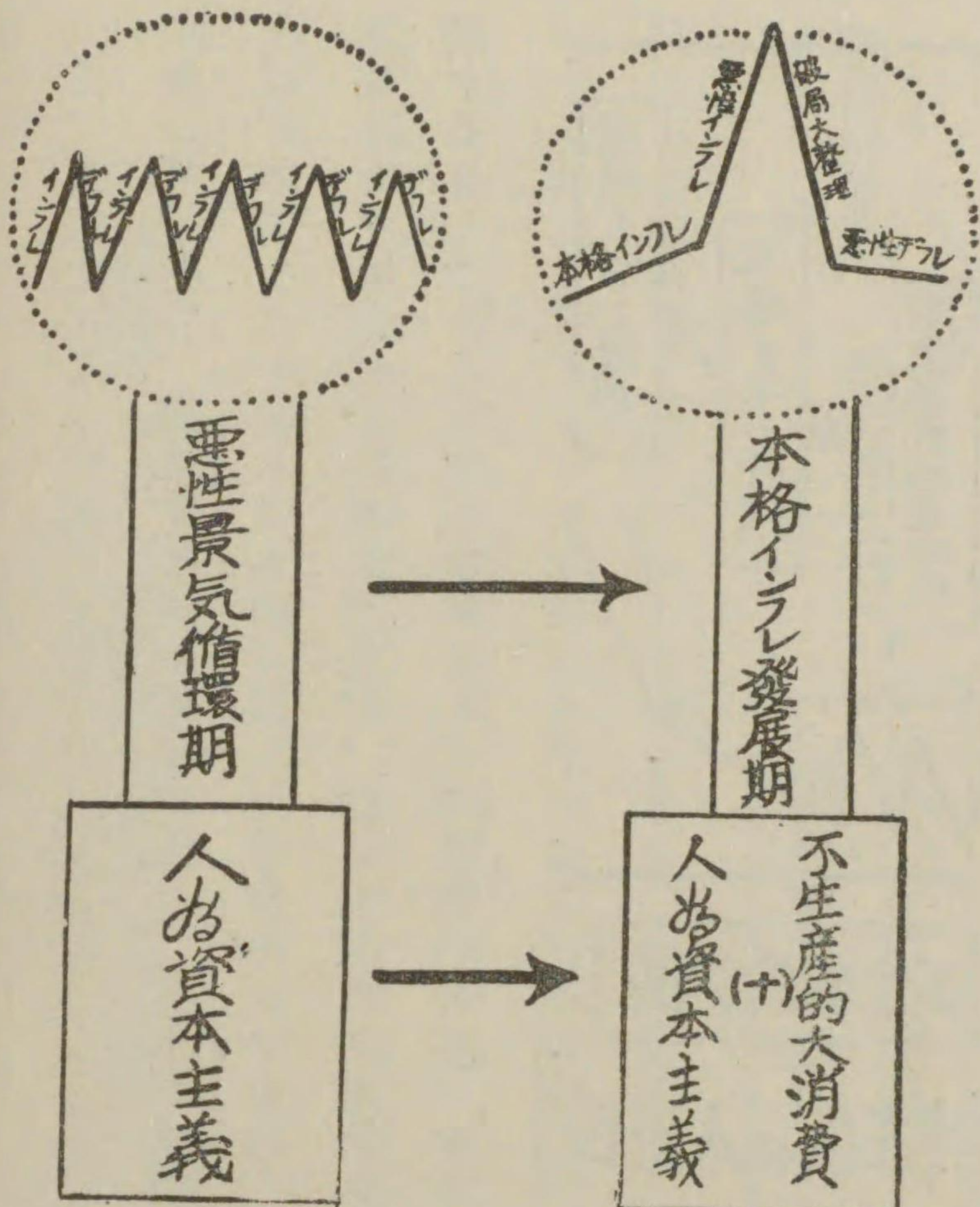


インフレ時代に進み、遂には、悪性インフレの爆發とはなるであらう。従て、之を表記して示せば上の如くなる。

果してインフレ來るか

本格インフレは景気循環變動に非ず

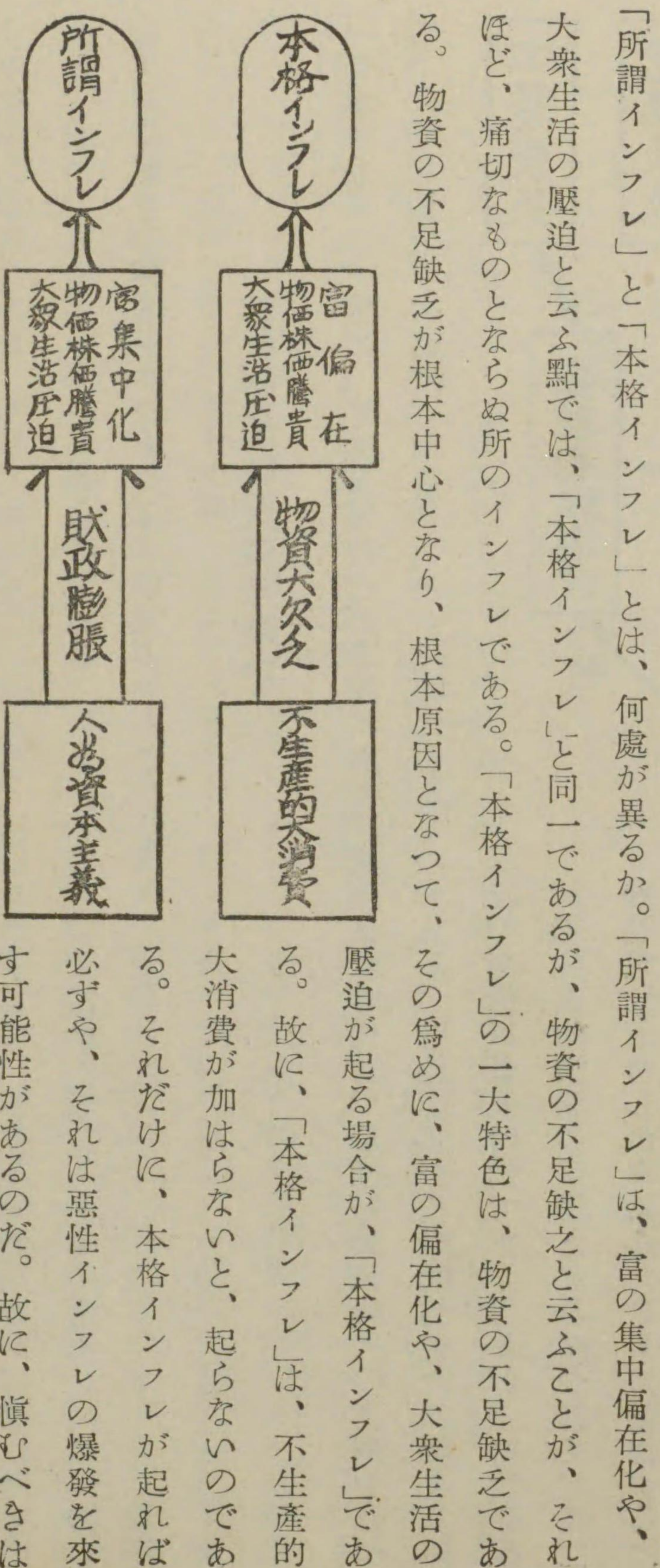
従て、景気變動の形態も、不生産的消費が加へらるゝにつれて、循環形態からして、加速度破局形態に變るのである。動反動の循環形態は、資本主義が生産的消費を中心として動く限りに於ての現象



である。資本主義が、不生産的消費を中心とするに至れば、動反動の循環形態は一掃されて、加速度進行に基づく所の破局形態と變化するであらう。その結果として、一大誤破算期を來し、その後には、悪性デフレを來すのである。然し、それを以つて、悪性インフレと悪性デフレの循環變動とは云へない。何とならば、それは、百年に一度か、そこいらの一大變化に過ぎぬからである。悪性景気は、インフレとデフレの形態を以つて循環する

が、本格インフレとなると、悪性インフレに一轉して、破局大整理の後には、悪性デフレの時代となる。それは循環でなくて、唯一回限りの變化に過ぎないのである。従て、之を表記すれば前頁圖表の如くなる。

所謂インフレと本格インフレの相違點

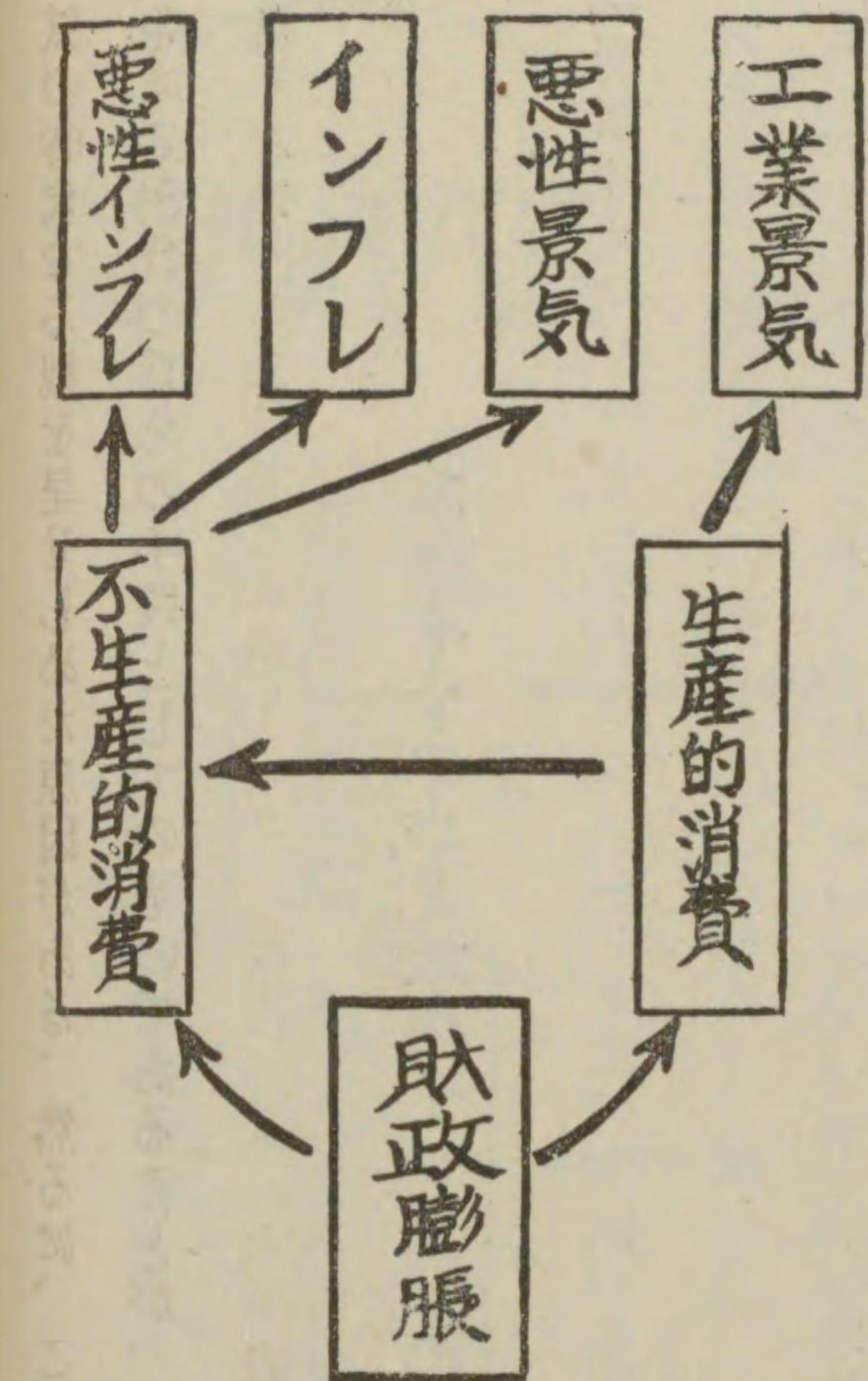


果してインフレ來るか

不生産的大消費である。乍然、國家存亡の秋には、已むを得ずして、不生産的大消費が行はれ勝ちである。故に、本格インフレを來すのである。何れにしても、「本格インフレ」と「所謂インフレ」即ち悪性好景氣との相違を表記すれば、前頁の如くである。

悪性景氣時代の末期か

日本の景氣は、當に、悪性景氣時代の末期にある。悪性景氣時代は、悪性好景氣時代の高潮を以つて、末期として、次第に、本格インフレに轉化するものである。財政膨脹が生産的消費を刺戟する間



は、悪性好景氣時代であり得るが、財政膨脹が不生産的消費の手段となるにつれて、悪性好景氣は何時しか本格インフレに轉化するに至るのである。本格インフレは不生産的消費を中心とするものだからだ。然るに、今迄は概して、生産設備の擴張、又は高度化の爲めに、財政膨脹が生産的消費を刺戟したことになつて居る。そこに、工業景氣、又は悪性景

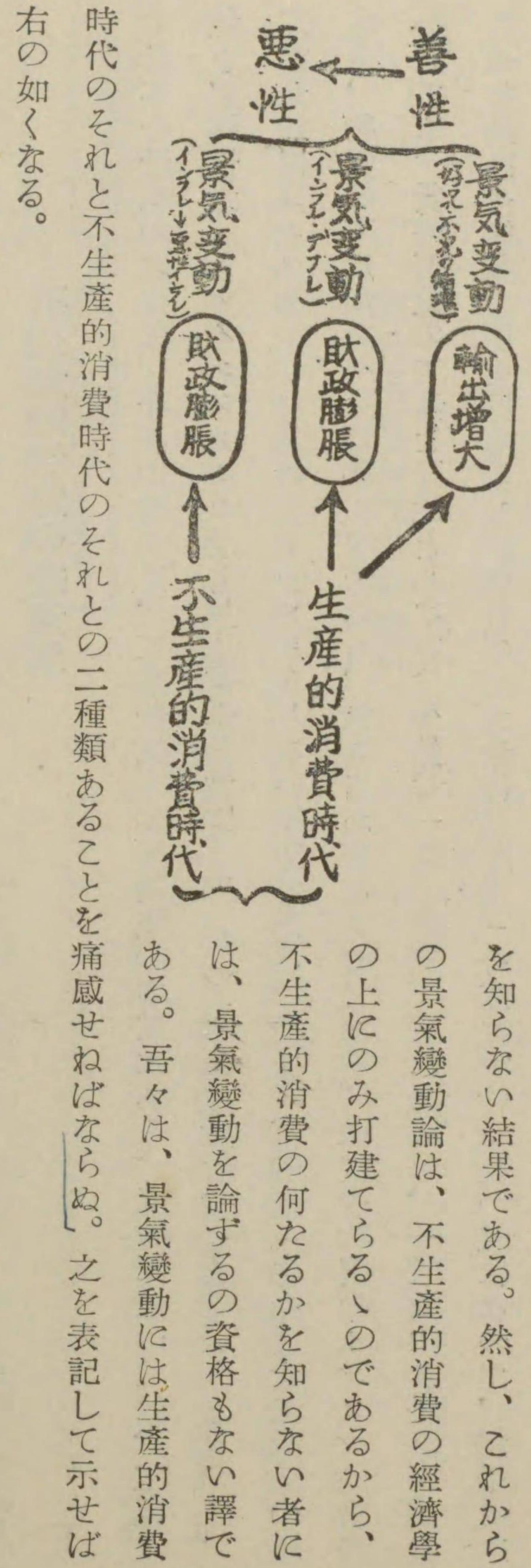
氣の時代たる觀を呈せしめた原因がある。然るに、この生産設備の擴張高度化たるや、その實は、不生産的消費の爲め的手段としてのものであることが、漸次、明かとなるにつれて、工業景氣は悪性景氣となり、悪性景氣は本格インフレと化し、(一)、物資缺乏、(二)、富集中、(三)、大衆生活壓迫、(四)、物價株價の昂騰不反落、(五)、通貨價値の不安心等を來すであらう。從て、之を表記して示せば前頁の如くなるであらう。

不生産的消費の經濟學

日本の景氣の地位は、今日の處では、工業景氣と悪性景氣の中間にある。見方に依つては、工業景氣と、悪性景氣と、インフレーションとの混合状態にある。却つて、悪性景氣やインフレーションは、工業景氣にカムフラージュされて、ハッキリしない状態である。從て、富の偏在化や、大衆生活の壓迫や、物資の不足傾向やを目撃しながらも、餘りさわがないのである。株價や物價のインフレ的騰貴を見ても、貨幣價値の下落を問題としない。乍然、一度、米價が更に昂騰し、一般的に食料品が騰貴し、日用品や家賃も引上げらるゝにつれて、大衆は、漸次「今迄は増給で良い氣になつて、好景氣來と思つて居たが、よく考へて見ると、どうも、普通の好景氣とは違ふ變な好景氣である」ことに氣づくに至る。鋭敏な人々は、「インフレーションになるのではあるまいか」と直覺する様になる。乍然、

果してインフレ來るか

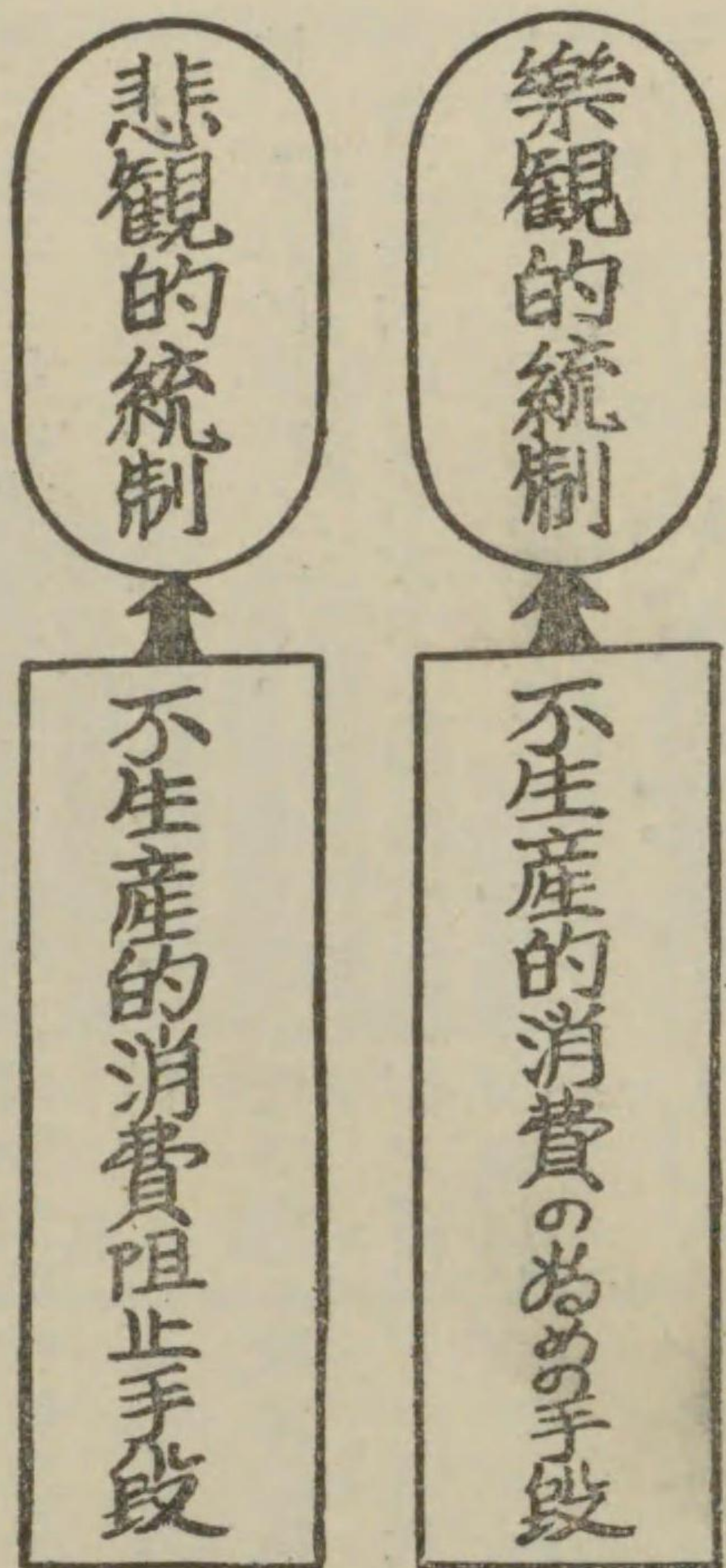
何故さうなるかを一般の人々は知らない。生産的消費がその實不生産的消費の手段であつて、漸次、不生産的消費の經濟的影響が表面化するからであることを知らない。詮り、「不生産的消費の經濟學」



統制悲觀は認識不足の産物

故に、根本の不生産的消費そのものを中断しない限りは、インフレから、遂には、悪性インフレとなることを避けることは出来ないのである。統制にしても、悪性インフレを抑へる譯には行かない。根本の不生産的消費をそのまゝにして置くのでは。却つて、これからの統制は不生産的消費の財源を

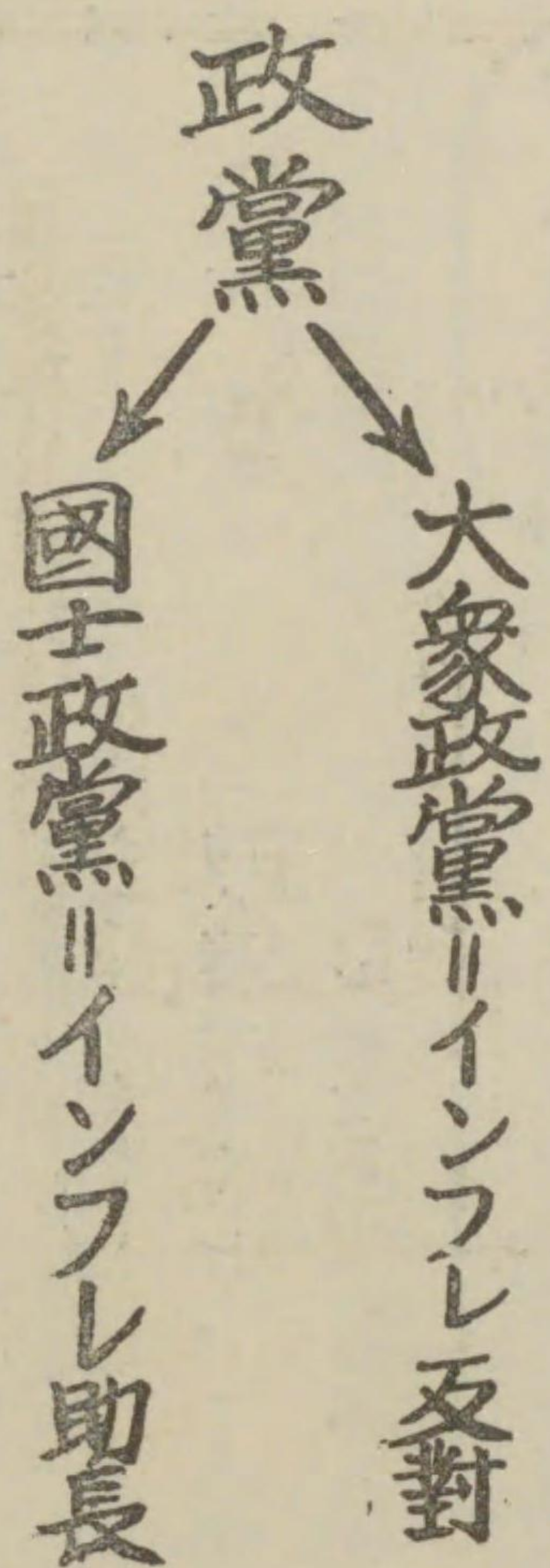
捻出して、無理にでも不生産的消費を繼續して行く爲めの財界ギャングに過ぎないのではないか。統制でなくして壓制である。國民經濟としては、不生産的消費や、その爲めの赤字公債強制賣却や、増税の斷行やを嫌がるのである。その嫌がるのを、無理に、國家主義を振廻して、強壓的手段でやつて行かうとするのが、これからの統制ではないか、従て、これからの統制は、所謂統制でなくして、強壓手段に他ならぬ。従て、これからの統制は、不生産的大消費を助長して、本格インフレを刺戟する作用を爲す。本格インフレの防止策でなくして、その刺戟作用である。故に、インフレを歓迎する人ならば統制樂觀の外ない。インフレ株を買つて居る人が統制を悲觀するのは全く逆である。統制が不



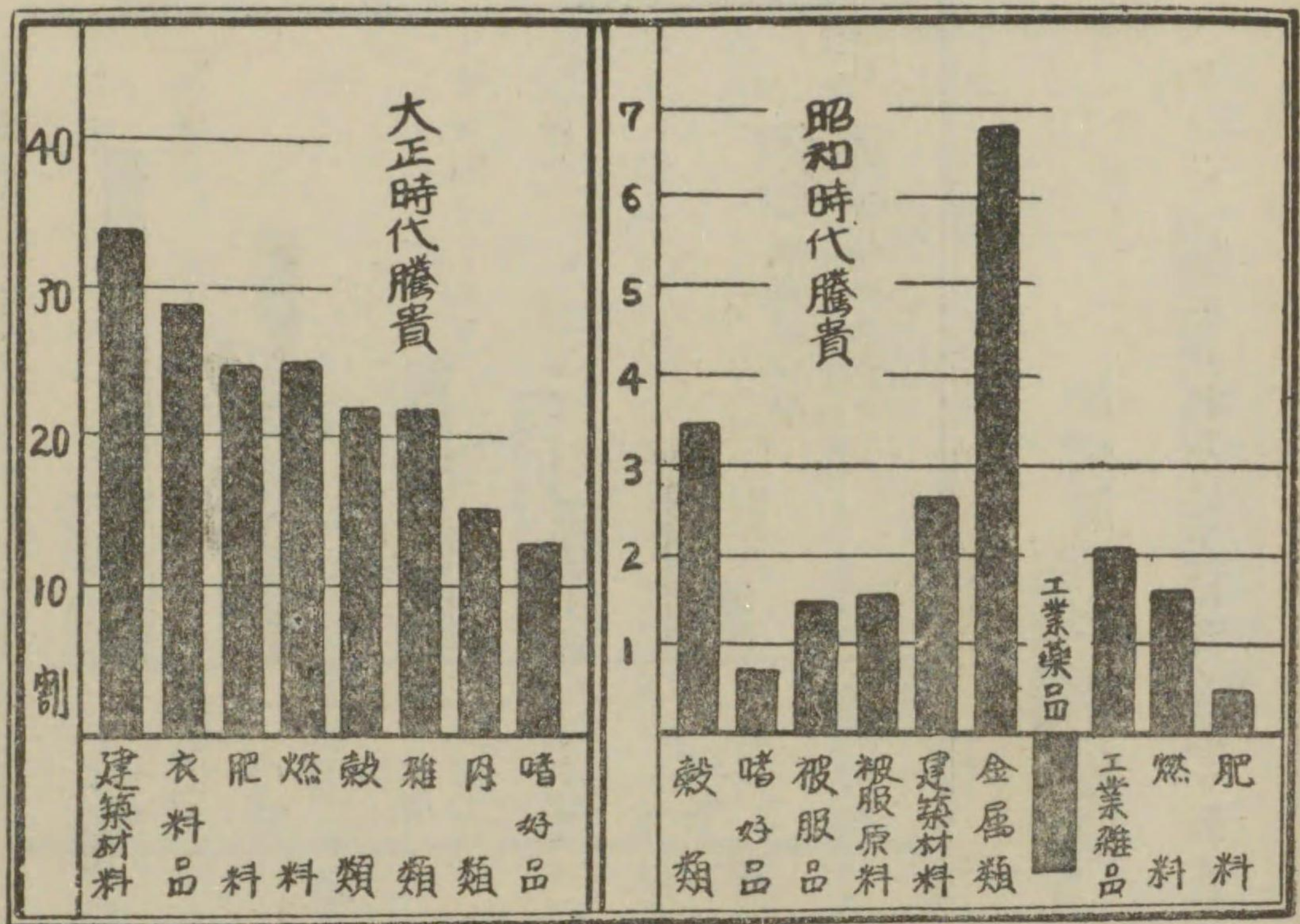
國民主義と國家主義の對立

生産的消費を阻止せんとしてのものであれば、統制悲觀もさることながら、統制が不生産的消費を繼續し助長せんが爲めの一大強壓手段である限り、統制悲觀は全く當らぬものである。寧ろ、その逆である。従て之を表記して示せば上の如くであらう。

不生産的消費は、×××の爲めに行はれる。然るに、×××は、國際對立と、飛行機戰術との結果であるからして、一朝一夕に之を止める譯には行かない。そこで、生産的消費が、漸次、不生産的消費になる。その結果として、赤字と増税の時代になる。大衆生活の壓迫と、富の集中化と、物資の不足と、生活費の累増とが眼に立つ。従て、國民の主義を代表する政黨の勢力増大を來し、政府としては、それに對抗すべく、國家主義を代表する政黨の構成を策す。そこで、大衆的政黨と、國土的政黨の對立時代にならざるを得ぬ。之が、ファッショ時代の共通現象なのだから。今日の政民兩黨は、以上、孰れかの政黨の中に自己を分解しなければならぬ運命にあるのだ。然らずんば、反時代的であつて、意義を爲さぬからである。代議士たるものは、須く、國土議員たらんか、大衆議員たらんかを、十分に自決すべきである。徒に、政府と對立し、財界を代表するなんてことは意味無きことだ。已に、資本と國



家は抱合ひ時代に這入つて居るのだから。吾々は、政黨が、右表の如く、大衆政黨と國土政黨とに二大別さるゝ時の來れることに深く思を致すべきである。

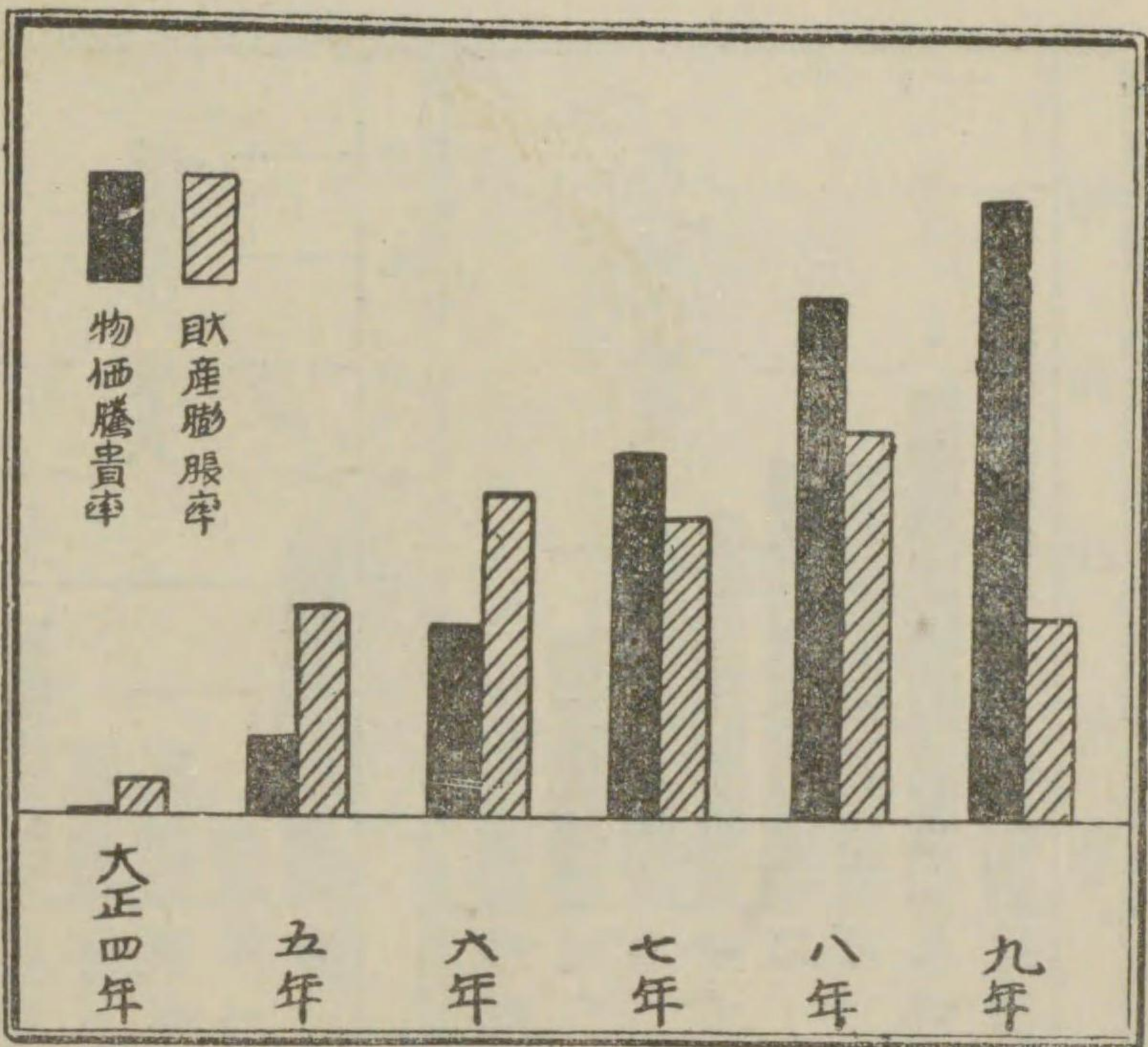


インフレ政策論

物價騰貴の凸凹性

大正六・七年の物價騰貴は、比較的に平均して居つたが、今回の物價騰貴は、極めてデコボコである。即ち、左表の如し。

品名	大正三年七月	大正九年三月	騰貴率
穀類	九八	三三二	二二八%
調味及嗜好品類	一一六	二七一	一三三%
肉類	八七	二一九	一五一%
衣料品	八三	三二五	二九二%
建築材料	七三	三二七	三四八%
肥料	八〇	二八一	二五一%
燃料	八四	二九四	二五〇%

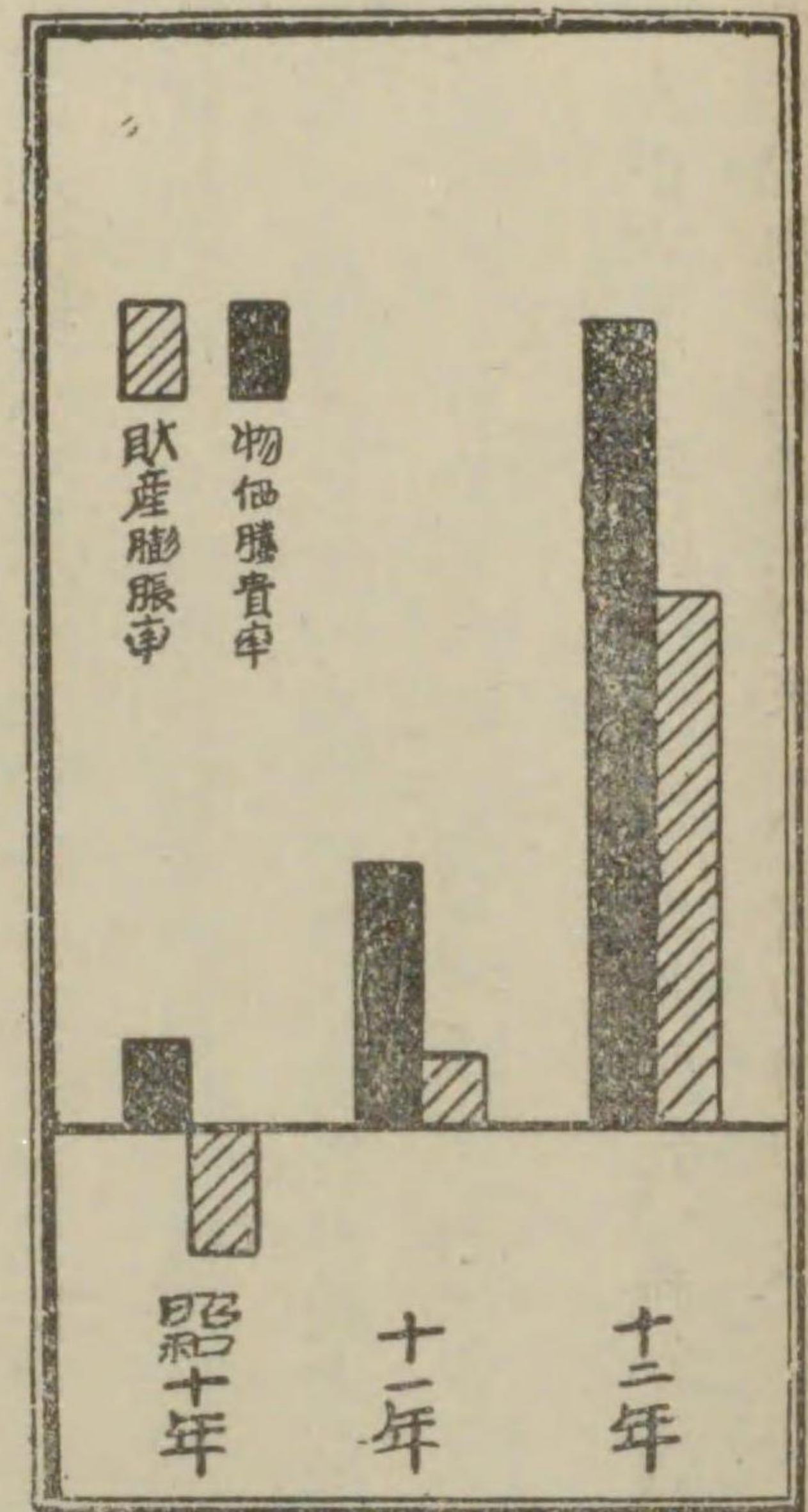


物価騰貴と富の増加

大正六・七年には、富の増加が先づ起り、物価騰貴は、後からやつて来たが、今回は、その逆であつて、物価騰貴先づ来り、富の増加は、それに辛うじて、追従して居る。即ち、上表及次表の如し。

種類	指数		騰貴率 (%)
	昭和八年一月	昭和十二年二月	
雑類	八〇	二五七	二二二
總指	九一	二九四	二二三
穀物	七九・六	二〇八・〇	三五六
食料及嗜好品	九一・九	九八・四	七・一
被服	七六・二	八七・九	一五・三
被服地	七六・〇	八八・九	一六・九
建築用材料	九八・六	一二四・七	二六・四
金屬類	八六・九	一四六・六	六八・七
工業藥品	八八・七	六三・三	▲二五・〇
工業雜品	八八・〇	一〇七・二	二一・八
燃料	八六・〇	九九・九	一六・一
肥料	八六・〇	九〇・七	五・〇
總指	八二・三九	九八・〇七	一九・〇

インフレと好景氣の相違



大正七・八年が「好景氣」(Prosperity)であり、昭和十二・三年が「インフレーション」(Inflation)であるのも、以上の點に原因する。即ち、(一)物價が平均的に騰貴し、且つ、富の増加に追従する場合が、

好景氣であり、(二)、物價がデコボコに騰貴し、且つ、富の増加に先立つ場合が、インフレーションである。常識的に云つても、國民が、一般に富んで、懐工合が良くなる時は好景氣であり、國民が、物價騰貴で、生活の壓迫を受ける時が、インフレーションである、と見られるではないか。好景氣もインフレーションも、一見して共通性に富むが、分析して見ると、以上の如き相違を有するのである。

インフレは不自由の産物

何故に、物價の騰貴が、富の増加に先立つか、何故に、物價の騰貴に、デコボコが多いのか、他言すれば、何故に、インフレーションは起るのか。之は、原因的には、「物資の不足」(Shortage)であるが、制約條件的には、「交換の不自由」(Unfreedom of Exchange)に基く。ブロック經濟や統制經

済に妨げられて、自由に、商品の交換が出来なくなると、そこに、物資の不足を來し、通貨の水ブタレを來して、インフレーションとなるのである。自由に有無相通することが出来さへすれば、インフレーションは解消する。故に、インフレーションは不自由の産物なり、と云へよう。

その實證

その證據には、封建時代には、極めて屢々、インフレーションが現れた。貨幣經濟の幼稚であつた徳川幕府以前に於ては、インフレーションは、物資不足、生活窺乏として現れ、貨幣の上に反映されて、物價騰貴、通貨價值下落とならなかつたから、一般に、インフレーションに氣が附かなかつたのであるが、幕府時代からは、中央集權となり、貨幣經濟が発達せる爲めに、大凶作となると、自由交換の不圓滑の爲めに、物資の不足となり、生活の窮乏となり、夫れは、物價騰貴、通價下落となり勝ちであつたのである。幕府が悪貨を増發したのも、凶作に依つて、税金が集らず、幕府の財政が逼迫せるの結果なのだ。幕府自體の消費が激増した爲めばかりではなかつた。自由交換の時代には、凶作になつても、インフレーションが起らないのは、有無相通することが出来るからである。

インフレ時代來の必然性

歐米に於ける小麦の凶作で、一九三六・七年にかけて、インフレーション氣分を漂はせたのも、ブロック經濟、統制經濟の時代であつて、物資の交換が不便だから、凶作に乗じて、益々、買占め賣惜みを來し、凶作をして、愈々、物資不足を激成せしめるに至つたからである。自然は不均等である。天は、各國に、資源を同等に與へては居らない。然るに、準戦時代に於ては自由交換が拒否されて、而も、各國は、資源の平等化を必要とするに至つたのである。茲に、既に、準戦時が、インフレ時代とならねばならぬ理由があるのではないか。

インフレ時代發生の根本的決定條件

従て、インフレ時代の發生をば、基本的に規定すると、左の如くなるであらう。

- (一)、資源は、不平等に分與されて居る。
 - (二)、自由交換は、禁じられて居る。
 - (三)、而も、各國は、物資と生産力の平等化を必要とする。
 - (四)、國際的には、自給自足化、國內的には、統制強化が行はれて、物資の交換が、益々、不圓滑になる。
- 故に、準戦時そのものは、どうしても、インフレーションに進まねばならぬ譯である。

統制のインフレ的效果

統制して、インフレーションを抑へる、と云ふが、事實は、その逆であつて、統制する程、インフレーションは激化するのである。インフレーションを解消せしめんとせば、統制經濟を廢棄して、自由經濟に返るのが一番なのである。フランスやドイツで、統制の結果として、インフレーションが抑制されたと見るのは、間違である。統制に依つて、却つて、インフレーションを激成し、インフレーションを壓縮して、將來に、インフレ・ダイナマイトとして、インフレーションをば、延長しただけのことである。獨佛共に、インフレーションは、一九一五年から猛進しつゝあつた。それが、統制の作用で激成され、壓搾されて、爆發性の悪性インフレに製造された譯である。斯くて遂に、抑制力よりも爆發力が勝つて、獨逸では、一九二三年、佛國では、一九二六年に至つて、悪性インフレの爆發とはなつたのである。

インフレ統制論の誤謬

故に、統制で、インフレが防止される、と見るのは、間違である。故に、各國が、貿易管理を激化して、必要なる物資の輸出を制限、又は、禁止するに至らんか、「金」(Gold)の一大失業が起つて來て、世界的に、「金インフレ」(Gold Inflation)を來すではないか。貿易制限が激化して、貿易と云ふ現象が、地球から消失した場合を想像して見よ。「金」(Gold)の無力がハッキリして來て、金インフレが起ると共に、物資の不足からして、鐵インフレ、アルミ・インフレ、バルブ・インフレ等々、各種の商品インフレを來し、夫れは、遂に、貨幣インフレに向つて進むではないか。今日、日本で「鐵の飢饉」と云つて居る所のものは、「鐵インフレ」であり、一種の商品インフレなのである。

唯一のインフレ対策

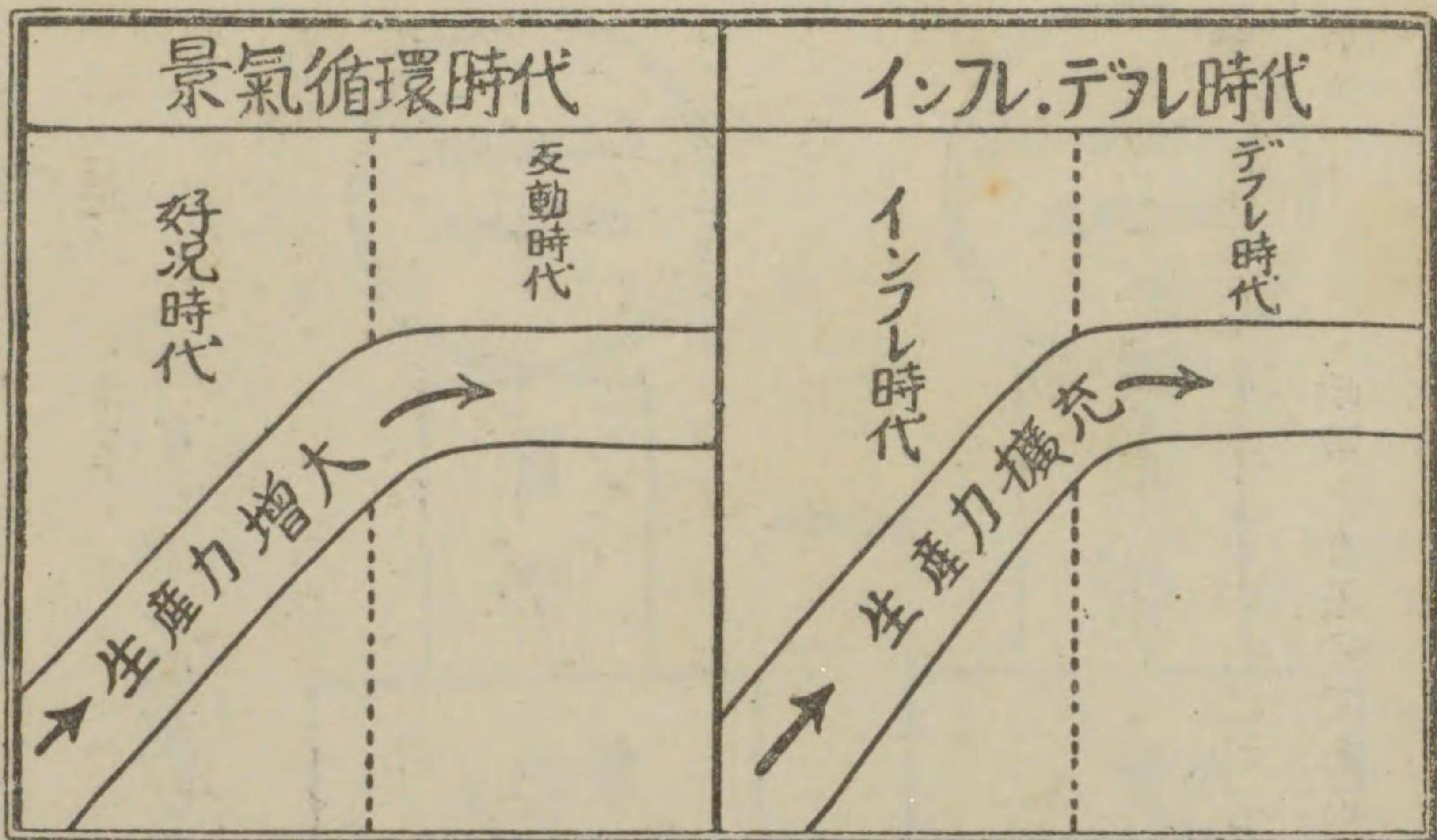
従て、統制がインフレ対策でないことは、明かである。インフレ対策は、物資の供給の圓滑化にある。自由經濟の回復にある。今回の高物價対策にしても、さうである。物資供給の圓滑化が第一策である。従て、「金」(Gold)を、ドシ／＼、現送して、日本が必要とする物資を、ドシ／＼、輸入することである。輸入制限でなくて、輸入促進である。産金買上値段を、一匁目十六・七圓に引上げて、産金を刺戟し、それらを、悉く、現送して、物資に易へることだ。

一大高物價対策

「そんなことをすれば、正貨準備率の低下と、金塊価格の騰貴とで、インフレーションになりはせぬか」と疑ふ人があるが、その點は大丈夫である。蓋し、物資が豊富ならば、金なんかなくとも不換紙幣で、立派に、やつて行けるからだ。問題は、「金」(Gold)が缺乏して、外國から物資を買ふことが出来なくなることだ。外國から物資を買つても、その對外決済の出来なくなることだ。斯うなると、物資不足と、決済不能とで、商品インフレと、爲替インフレとの二大インフレに襲はれることになるのであるが、幸に、日本には、金鑛が豊富なのだから、産金さへ刺戟すれば、金の缺乏を來しはしない。従て、以上の心配は少しもないのである。貧鑛ながら、火山國だけに、鑛量が豊富であるから、採掘法と選鑛法の進歩で、産金額は増大するだらう。従て、金を物資に易へることが日本としての一國策であり、高物價對策であるのだ。

インフレ政策の發展

金を山から掘出して、夫れを原料に替へる政策は、生産力擴充の最良策であるから、資源の少い日本で、産金買上値引上げの行はれることは、必至である。然るに、斯る産金買上値引上げは、結局に於て、インフレ政策となるのである。蓋し、生産力擴充なるものは、インフレーションに他ならぬからだ。生産力擴充の爲めの統制は、結局に於て、「インフレーションの爲めの統制」(Control for inflation)



インフレ政策論

であつて、「インフレーションに對する統制」(Control against

inflation)ではなすのである。従て、統制でインフレが否定

されると考へての悲觀は、全く、意味を爲さない。生産力擴

充時代は、即ちインフレ時代であるのである。デフレになる

とすれば、それは生産力擴充が一巡してからのことである、

このことは、生産力増大期間は好景氣であり、生産力増大が

一巡する頃からして、反動不況に向ふのを以て見ても分るで

あらう。同様にして、生産力擴充期は、インフレ期であり、

生産力擴充一巡時からデフレ期となるのである。従て、之を

表記して示せば、上の如くである。

消費物件貨幣から大砲貨幣へ

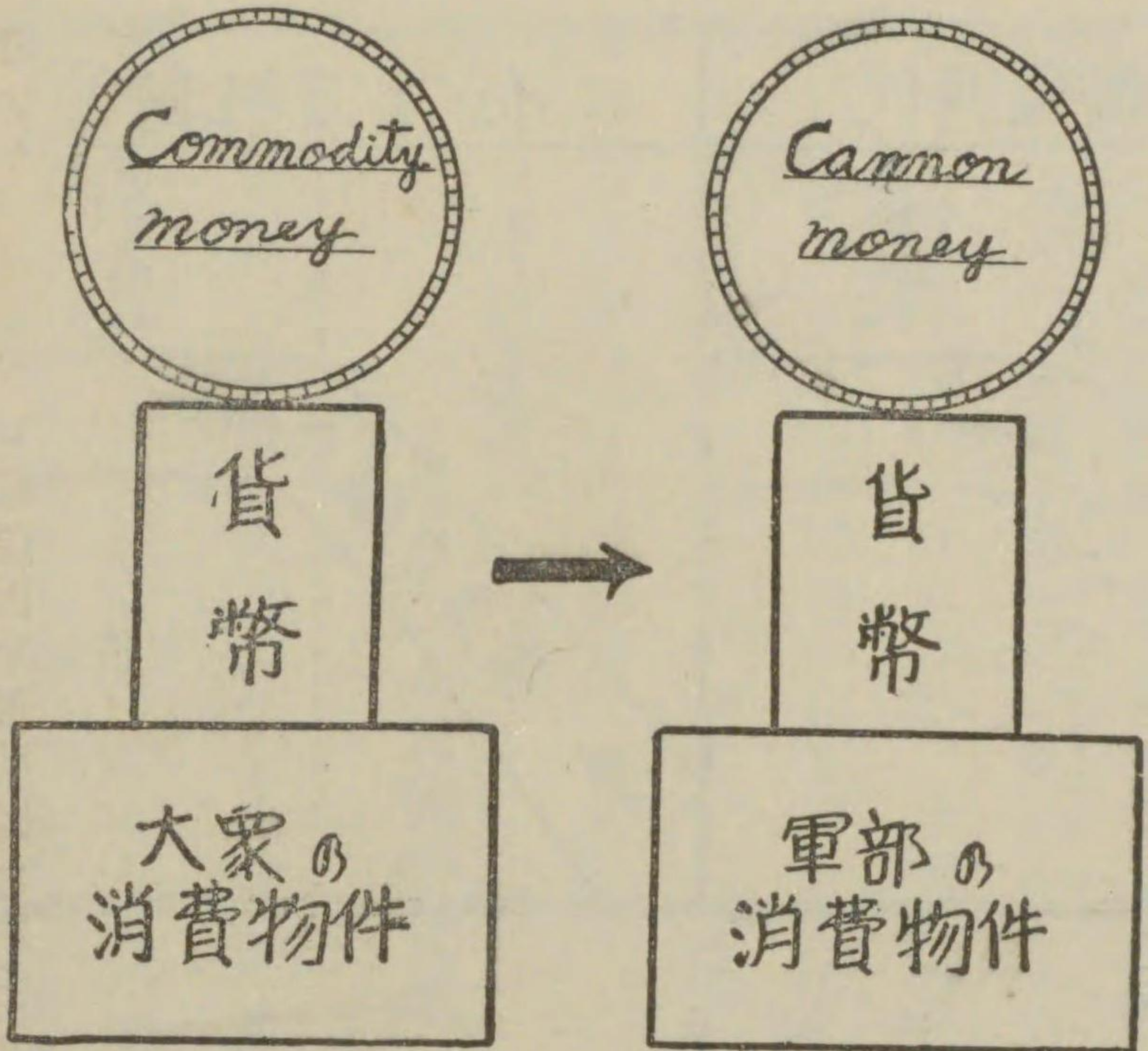
消費物件で裏打ちされて居つてこそ健全貨幣であるのだ。

健全貨幣は、即ち消費物件貨幣だ。然るに、日本の貨幣は、

時と共に、生産力擴充の進行と共に、消費物件貨幣からして

大砲貨幣に代らんとして居るのではないか。之を表記して示めせば、左上の如くである。

インフレ必至なり



の不足からして、インフレを来さずにはおかないであらう。金さへ澤山あれば、インフレにならぬの

ならば、トランスヴァールで金が澤山に出た時に、何故に、インフレになつたかが分らなくなるではないか。インフレの原因を簡明にわからせるのには、商品貨幣以外は、總て、土地貨幣でも、大砲貨幣でも、黄金貨幣でも、皆インフレ・マネーだと云ふことを説明してやるのが一番である。この點から見て、大砲貨幣時代と見て、筆者は、インフレ必至を叫ぶものだ。

生産力擴充のインフレ的性質

準戦時代のインフレ對策

「日銀が十億も公債を抱込んで、紙幣の増發をやることになれば、不換紙幣の觀念がハッキリして來て、それこそ、インフレになる」と見る人々が多い。深井英吾式健全通貨論者が、それである。けれども、物資さへ豊富なれば、日銀が公債を抱込んで、通貨を如何に増發しようと、インフレになるものではない。蓋し、インフレは、結局に於て、「物と金との相對關係」[A matter of relativity between goods and money]であつて、「物に對して金の分量が激増するか」[The increase in amount of money relative to volume of goods]、然らずんば、「金に對して物の分量が激減するか」[The decrease in volume of goods relative to amount of money]でなくては、起り得ぬからだ。従て、物資さへ、常に、豊富に保つならば、日銀が通貨を多少増發した處で、インフレになる譯はないのである。物資に比較して過大になる程の通貨供給をやれば、インフレになるからして、財政膨脹、通貨増發の必然性ある場合には、殊に、物資を豊富にする政策が必要ではないか。インフレ阻止策として、再軍備の必要なく、従て、財政膨脹、通貨増發の必然性なければ、別であるが、従て、生産力擴充政策よりも、物資供給豊富政策の方が、準戦時代のインフレ對策となるであらう。

生産力擴充と物價問題

生産力擴充で、物價が下落する、と思ふのは、その生産力擴充が、原價の安い大衆必要品の生産力の擴充である場合に限られる。高い原價で、生産力を擴充することは、物價高の原因となつても、物價安の原因とはならぬ。××××××としての生産力の擴充では、生産力の偏倚からして、インフレを刺戟するのみである。今日の生産力擴充は原價が高く、××××××的のものであるから、生産能力と生産高とは×××中心に増大しても、低物價やインフレ阻止の役には立つ筈がない。却つて、生産力擴充の期間に於て、物資不足とならば、物價高とインフレとを激成するのみであらう。

從來の生産力擴充

故に、「金から原料へ」(Gold to Material)の政策こそ、日本に於ける唯一のインフレ對策となるであらう。生産力擴充が、原料産出高増大の意味ならば良いのだが、重工業製品の生産高を、高原價で

無理に、擴充するのでは、却つて、原料不足インフレを強化するのみに了るであらう。從來の生産力擴充なるものは、國民貯蓄力増大の反映に過ぎなかつた。例へば、筆者が一萬圓を銀行に預金する。銀行は、その金を進歩的な事業家に貸與する。事業家は、十錢の鉛筆を五錢で作ることに成功して、その爲めに、工場を作る。その一萬圓を、その爲めに使つた、とすると、茲に、國民貯蓄力が生産力擴充となつて、反映したことになる。普通の生産力擴充は、これである。

現下の生産力擴充の意義

斯る生産力擴充に於ては、生産高の増加よりも原價の低下が中心となる。製品にしても、一部階級の需要でなくて、一般大衆の需要を、直接間接、問題として居る。その結果として、斯る生産力擴充は、それが完成されるにつれて、大衆生活品の價格低下となり、大衆の福利は増進されるであらう。然るに、今回の生産力擴充は、財政の膨脹に依つて、××の要求する品物の生産高を、原價は多少高くなつてもよいから、迅速多量に、製造する意味のものである。従て、斯る生産力擴充が完成した處で、物價が、果して、低下し得るかどうか疑問なのである。生産力擴充の期間に於て、生産設備品の需要の爲めに、物價が騰貴するのみならず、生産力擴充一巡後と雖も、物價は下らぬ。若し、物價が下るとすると、新しく出來た生産力は、原價割高になつて、やつて行けないから、恐慌に襲はれるだらう。××が、註文を減少させる様なことになると、原價割高の生産力は、他に振向けることが出來なくなつて、大打撃を蒙るであらう。従て、現に、今日でも、事業家は、××が生産力を擴大せよ、と云つても、將來を考へて、容易に擴大したがるのではないか。

健全なる重工業の發展とは

重工業が發達するのも良いが、外國のそれと太刀打の出來るやうな低原價良製品の生産力を有する重工業の發達であつて欲しいものである。然るに、斯る重工業の發達には、十年、二十年、三十年の永き歲月を要する。國民貯蓄力が、自然と、重工業の發達を促進して、初めて、可能となるものなのである。財政膨脹で、一氣に、刺戟した重工業發達は、結局に於て、軍部の突支棒がなくなれば、忽ち倒れねばならぬ健全なるバラックに過ぎない。重工業の發達でなくて、重工業の膨脹である。矢張り、資本主義發達の線に沿うて、自然に、伸びて行くのではなくては、健全なる重工業發展とは云へない。

自給自足經濟の激化

そこで、人に依ると、下手に、日本で重工業を膨脹させるよりは、必要な重工業品を、外國から、

ドシ／＼買つたらよからう、と云ふ。之に對して、反對するのは、勿論、軍部である。これからの戦争は、自給自足を必要とするからだ。各國とも之を熟知する。そこで、再軍備運動は、即ち、自給自足の運動となるであらう。従て、再軍備が進行するにつれて、自給自足制度も進行するからして、世界貿易は益々不圓滑になる、と見なければならぬ。今日では、再軍備の途上にあり、自給自足の途中にあるからして、夫れに必要な原料や生産財やの世界貿易でもつて、貿易高は増大して居るが、各國が、自給制度を、或る程度まで、完成した、となると、特定の原料品、又は輕工業品以外は、餘り貿易がなくなりはせぬか。その特定の原料品にしても、輸出禁止を斷行されてはやり切れない。茲に、貿易、變じて、物物交換となるべき傾向が考へられる。各國の割當制が更に激化すれば、當然、貿易が、物物交換に接近するもの、と見ねばならぬ。

金の失業

世界が物物交換の状態に陥れば、問題は、各國の資源であり、生産力であるからして、「金」(Gold)が、如何に、澤山あつても、資源か生産力の無い國は、寶の持ち腐れになつて了ふ。その時に於て、果して、「金」が、寶であり得るかどうかも、怪しいものである。國際金融の不圓滑が、金本位制を破壊した如く、國際貿易の不圓滑は、遂に、「金」(Gold)そのものをば、半失業の状態に追ひやるのではあるまいか。國際貸借が出来なければ、金本位の意義がない如く、物物交換になれば、「金」の必要もないのだから。

金インフレの必然性

爲替相場の維持に「金」が必要だ、と見る人もあるが、國際貸借が消失し貿易管理が激化すれば、今日の獨逸の如く、「金」が、殆んどなくとも、「國定爲替相場」でやつて行ける國もあるのだから、之を考へると、統制經濟をやる氣になれば、「金」なんぞ、大して、入らないことが判る。従て、統制經濟が、世界的に、強化されれば、「金インフレ」(Gold Inflation)が、一應、世界を支配し、世界の物價は、自給高、統制高、金インフレ高を示すもの、と見られよう。物價の世界的低下は、却つて、自由經濟にして有無相通じなくては望み難いことだ。

自由經濟の否定と金の重要性

金を排除する迄に、完全なる統制經濟が、世界を支配するかどうかは別として、少くとも、統制經濟が、世界的に強化される、としたならば、「金」の重要性も減退するだらうことを、筆者は説くのみである。金本位の崩壊は、決して、「金」の重要性の否定ではない。却つて、その逆である。乍然、自

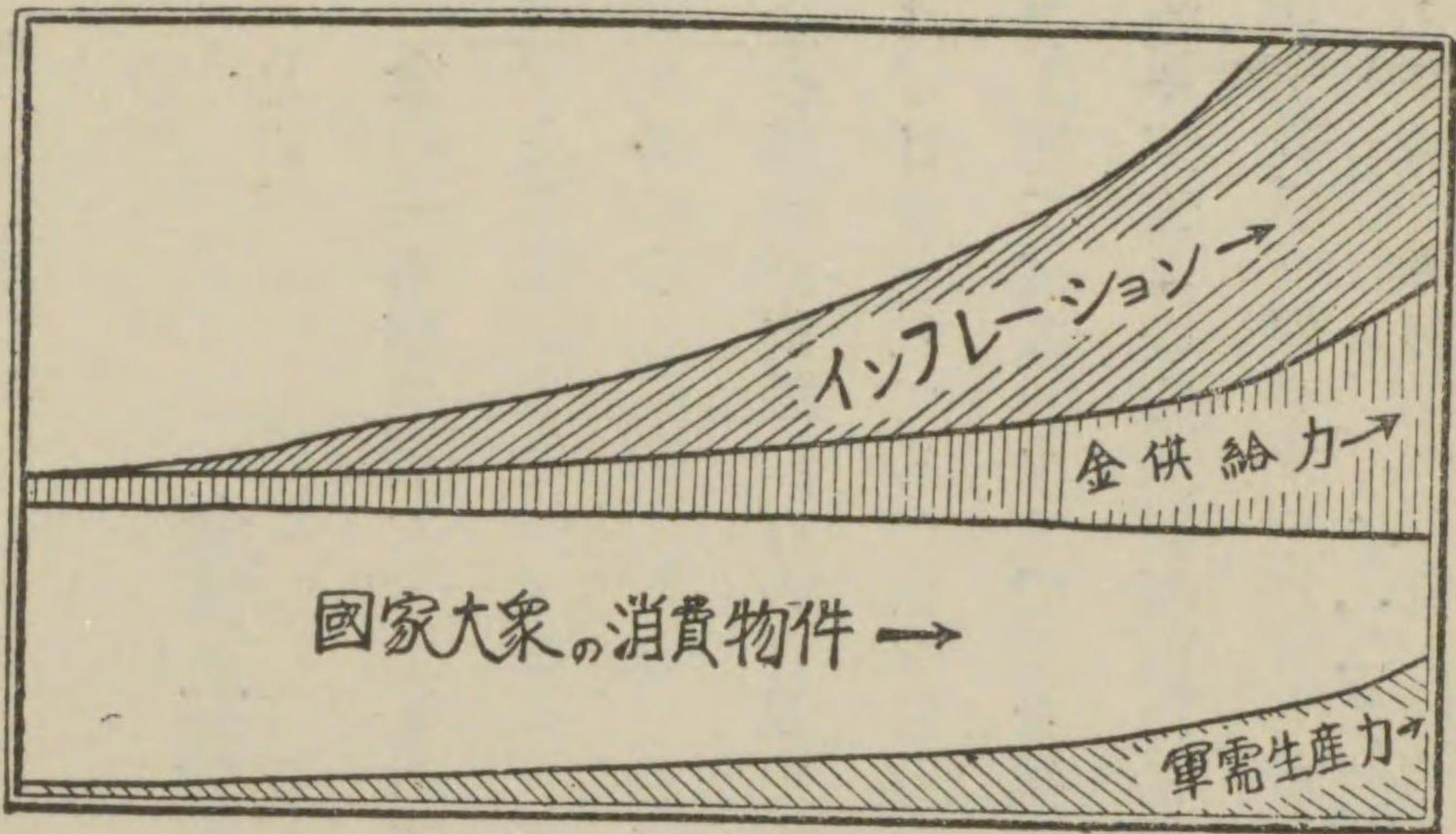
由經濟の否定は、遂に、「金」の重要性の否定とならねばならぬのである。金本位の崩壊で、「金」は、國內的の役割を失つたが、貿易管理の強化で、金は、國際的の役割をも失ふであらう。各國が、自給自足の原則に立て籠り、原料の輸出を、極度に制限するに至れば、「金」を持つて居つても仕方がなくなるのであるから。

金インフレか金の失業か

金買上値を引上ぐべし

金の「供給過剰」(over supply)は、「黄金インフレ」(Gold inflation)の形で出現する。米國は、既に、それに近づきつゝある。故に、米國では、ロシアの金流入を阻止せんとし、金買上値の引下げが云々されて居るのである。この點から見て、金の英米市場での騰貴は、一巡の情勢にある。ロシアは金の値段が頂點に近いと見て、盛んに、金を海外市場で賣却して、ポンドに替へて居るが、このことは、日本としても、出来るだけ真似るべきではあるまいか。金を國內に留置するよりは、金買上値を引上げて、急ピツチで金を掘り、夫を盛んに海外に送つて、ドルなり、ポンドなりに替へ、大いに原料や軍需品の購入に振向けるべきであらう。

インフレ傾向は必至



何れにしても、世界全體として見ると、金の供給は増大するが、再軍備を通じて、不生産的消費が行はれて、國民大衆の消費物件は、金供給増に比して減少を示すであらうから、所謂「金過剰」からしてインフレ傾向は免れないであらう。之を表記すると、上掲の如くである。

金を掘つて原料に替へよ

生産力擴充の一策は、金買上値を引上げて、産金を刺戟し、金を輸出して、原料に替へることである。これは、世界が金の供給過剰になる迄の間に、急ピッチでやらねばならぬことである。グヅ／＼して居ると、金の輸入禁止をば、英米がやらないとは云へぬからだ。金の輸入禁止に先立つて、或は、嚴重なる貿易統制をば、各國が採用し、原料類の輸出を極度に制限し、金を以てしても十分には原料が買へなくならぬとは云へない。そこで早く、急ピッチで、原料のない日本では、金を掘つて、之を原料に替へる必要がある。

金の重要性

金の重要性は、必ずしも、常に、一定しない。金の重要性には非常なる變動がある。金が大局的にどうなるかは別として、各國が、極度の資源統制を行ひ、貿易管理を斷行することになれば、一應、國際場裡に於ける金の重要性も激落することなきを得ないであらう。再禁止は、金本位制を破壊し、貿易管理は、金の重要性を減殺するのではなからうか。金が全能の神であり得るのは、自由主義時代に於てであることを知らねばならぬ。

國際インフレの可能性

「金」の失業は、「原料」の多忙に正比例するであらう。原料が、統制の爲めに、多忙と重要とを増大するほど、金は色あせて行く。そも／＼、統制の極致は、自由の神である金の排除を意味するものであるが故に、共産主義を初めとして、計畫經濟論者が、金の失業を豫斷するのも、故なしとしない。自由を完全に否定すれば、「金」も、貨幣と共に失業せざるを得ないのであるから、各國が、原料の輸出を極度に制限すれば、それだけ、金の重要性は減少するであらう。國際決濟方法が、金から國際銀行制へと移動する時まで、極端には見られないとしても、原料で測られたる金の価格は、低落せざる

を得ない。他言すれば、原料の国際価格は増大するのである。こゝからして、国際インフレ時代を來す。故に、国際インフレーションは、貿易統制の結果だと云へる。統制は不自由を來し、不自由はインフレーションを來すのである。従て、国際自由、世界平和なくしては、インフレ必至と云へよう。

金インフレか金失業か

金塊相場の昂騰につれて、金の産出高は激増しつゝある。一九二九年に千九百五十八萬オンスであつたものが、一九三六年には三千五百萬オンスと、約十割の激増である。即ち左表の如し。(單位千オンス)

	一九二九年	一九三六年
南阿	一〇、四二二	一一、三四〇
ロシヤ	一、〇八五	七、三五六
カナダ	一、九二八	三、七二〇
米國	二、〇五七	三、七一四
濠洲	四二七	一、一六〇
其他	三、六七七	七、七一〇
合計	一九、五八六	三五、〇〇〇

金塊相場の昂騰につれて、貧鑛の精鍊が出来る様になり、新坑の開発も行はれるから、金の産出高は今後益々激増するのみであらう。左表を見よ。

世界金生産高 (單位キログラム)

	一九二七	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五	一九三六
世界金産額 (ロシヤ生産高は推算)	五九〇、〇〇〇	七四四、〇〇〇	七八八、〇〇〇	八四六、〇〇〇	九三五、〇〇〇	一、〇五〇、〇〇〇
内譯						
アフリカ	三四三、七〇〇	三九九、七〇〇	三八八、五〇〇	三七八、八〇〇	三九三、二〇〇	四一五、〇〇〇
北アメリカ	一二三、一六四	一六七、七二二	一六三、八七六	一七九、二六二	二〇三、二五一	二三二、四〇〇
内 北米合衆國	六五、五三六	七二、四七二	七一、六五四	八六、四三〇	一〇〇、六八三	一一六、〇二二
カナダ	五七、六二八	九四、六九一	九一、七三四	九二、四四二	一〇二、一七二	一一六、〇一六
中央アメリカ	二四、八一三	二〇、七三八	二二、五四四	二四、六一五	二五、〇〇〇	二七、〇〇〇
南アメリカ	一七、二〇〇	二二、一〇〇	二八、一〇〇	三三、一〇〇	三四、一〇〇	三六、五〇〇
アジヤ	三三、六〇〇	四三、七〇〇	五〇、四〇〇	五二、九〇〇	六一、七〇〇	七〇、〇〇〇
内日	一五、七〇六	二三、〇一四	二五、八八八	二八、五七七	三四、一八九	
ロシヤ	二二、六〇〇	五九、〇〇〇	八五、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	
歐	五、五六〇	一一、一四〇	一八、三〇〇	一七、三〇〇	一五、二〇〇	一五、五〇〇
大洋洲	二一、三三〇	二九、五一九	三四、八九〇	三九、五五〇	四二、一〇〇	五二、〇〇〇

國際聯盟の調査によつても、一九二七年に、五十九萬キログラムであつた産金高は、一九三六年には、百五萬キログラムとなつて居るのである。その結果として、フランス以外は、各國とも、金の保

有高は、激増して居る。英國は、九億三千三百萬弗から十五億三千百萬弗と、八割方の増加であり、米國の如きは、四十億弗から六十八億弗に激増した。即ち左の如くである。

世界主要國金準備變遷 (單位百萬舊合衆國金弗)

	一九三三年 十二月	一九三五年 十二月	一九三六年 十二月	一九三七年 三月
合衆國	四、〇二二	五、九八〇	六、六四九	六、八三三
日本	二二二	二五一	二七三	二七九
日	—	—	—	—
ロシヤ	四一六	—	—	—
フランス	三、〇一五	二、五九八	一、七六九	一、六八一
イギリス	九三三	九七七	一、五二九	一、五三一
ドイツ	一〇九	三七	一六	一六
イタリア	三七三	一五九	一二三(二月)	—
合計 (含ミチヤを)	一一、六一五	一二、七〇〇	一二、七八六	一三、〇〇〇

從て、金偏在の問題は、何時しか、金過剰の問題に轉化する時があるに相違ない。金過剰は「金インフン」(Gold inflation)として現れる。「金過剰」The over-supply of goldは、(一)、物財側からは、原料輸出の制限に依る金の國際貨幣としての效力の低減から原因するが、(二)、貨幣側からは、金それ自體の産出高の激増に刺戟されてやつて来る。斯かる金過剰の結果が、金インフレとなるのを防止する爲めには、(一)、金の偏在を緩和することも必要であらうし、(二)、金の價格を引下げること

必要であらうし、(三)、金利の引上げ、又は、金準備率の引上げを斷行することも必要であらうが、更に、必要なることは、(四)、準戰經濟と、平和經濟に引戻し、統制經濟を、自由經濟に還元して、國際貸借と自由通商との圓滑を來さしむべきことが、根本的に必要となる。從て、各國が、若しも、この必要に應じないで、金の生産過剰に對して爲す處がなければ、恐らく、金インフレは、聽て、世界を風靡するに至り、金インフレを通じて、自然に、高物價と金塊安を結果する外ないであらう。

金の世界的偏在

一九二九年に、一千九百萬オンスであつた世界産金高は、一九三六年には、三千五百萬オンスと、約八割方の激増であつた。この外、東洋方面の死藏金の輸出があり、それに平價切下げで、金價格の膨脹が行はれたのだから、價格に於ける金の増加は、素晴らしいものである。それが、大半、英米、殊に、米國に集中し、偏在するに至つた。現に、左表の如くである。(單位百萬オンス)

	英	米	獨	佛	オランダ	スイス
一九三二年	二八	一四五	一一	二二九	一七	二二
一九三六年	七四	三三二	〇・八	七七	一四	一九

英米の金保有高は三倍以上に激増せるに、獨、佛、オランダ、スイスの如きは、夫れが激減して居るのである。そこで、このまゝに、英米が、金保有高の集中偏在を放任するならば、必然的に「金

インフレ」gold inflation)になるのであるから、何とかして、その對策を講じなければならぬこととなつたのである。

金インフレ必至下の米國

當面の小對策として、米國は、準備率の引上げをやつたのだが、この勢ひで、産金高が激増し、東洋の死藏金が輸出され、それらが、ドシ／＼、米國に集中するのでは、遂に、百%まで準備率を引上げた處で、所詮、追つつかなくなることは、當然である。と云つて、金利を急激を引上げること、財界反動を來すから出來ない。金價格の引上げも、一寸考へると、出來さうだが、出來ない。蓋し、左の理由に依る。

(一)、金價格を引下げると、弗の爲替相場がそれだけ騰貴し、米國の輸出貿易が不振になるから、米國財界に大反動が來ること。

(二)、金價格の引下げは、米國の金の外國への遁走を來し、所謂 Hot Money の苦を、米國は、嘗めねばならぬこと。

以上の理由で、金價格の引下げも、一寸出來ない。では、金の輸入を制限したらどうか。矢張り、それは、米國の貿易を不振ならしめて、財界反動を來すから、駄目である。

金價格引下げは實行不可能

勿論、財界反動を覺悟して、金價格の引下げをやる氣になれば出來ないことはないが、それには、金インフレの危険乃至切迫に對する一般の認識が、まだ不足して居るし、金の偏在せる今日、金の不足せる國々は、金價格を引上げようとも、引下げようとはしないから、世界的に一致の行動が執れないのである。物資が平均して居ればまだよいのだが、物資が不平均であるからして、物資の少い國々は、金の産額を増加せしめて、それで、物資を購入せんとし、その爲めに、金價格を引上げようとするであらうから、金價格の引下げを爲し得る國は、英米三箇國に限られる。英米二箇國のみが、金價格を引下げたのでは、英米二箇國の貿易が打撃を受け、財界反動を蒙るのみだから、恐らく、金價格引下げは行はれないであらう。且つ、輿論も、金價格引下げを以て、デフレ的行動なりとし、財界に及ぼす反動の痛烈を豫想するに於てをやだ。また、世界を通じて、統一的な銀行制度の採用されぬ限りは、金インフレに對する世界各國の共同動作も、見込み薄である。従て、理想の世界ならば、今日の如きは、當然に、金價格の引下げ、或は、生産統制が行はるべきだが、現實の世界では、必要があつても出來ない。

金インフレの根本対策

その結果として、遂に、金インフレに陥込むのであらう。そこで、初めて、金インフレに對する世界的の大対策が講ぜられるのではあるまいか。金價格の引下げで恐慌を來した、とあつては、英米兩國の爲政者は、國民から怨まれるであらう。恐慌よりも、金インフレの方が、責任も輕いし、國民の氣受もよいのだしするから、結局は、金インフレに行く外あるまい。その結果の大対策と云ふのは、(一)、金價格の世界的引下げに依る生産の抑制、(二)、金の流通手段としての地位の回復、(三)、世界的自由通商を來し、爲替相場の回復を計り、過剰金をば、債務國に貸付けて、金の偏在の緩和を計ること等。即ち、世界通商、國際金融の回復を計ること等である。その爲には、國際對立の緩和と、世界經濟の再建工作とが必要となつて來るのである。これは、仲々の大事である。乍然、こゝまで行かぬことには、金インフレに對する根本対策の實行とは云へない。故に、結局に於ては、金インフレで悩まされた後でない、斯る根本対策も講ぜられぬから、從て、金インフレは、(一)、金産高の激増、(二)、金偏在の激化につれて、必然的に起つて來ると見るの外ないのである。

國際對立遂に金インフレを來す

金インフレの起らざるを得ざるに至つた根本の原因は、矢張り、國際對立の激化に依る再軍備の急テムポの進行だ。この爲めに、各國は、生産の急増大を必要とし、從て、物資の不平均の分布の爲めに、物資不足國を見るに至つた。この物資不足國は、金準備を持出すか、金價格を引上げ、産金奨勵に依つて、物資國から物資を買つて來る外ないのである。物資を必要とし、且つ、物資の分布が偏在せる限り、物資國に金が偏在し、從て、金インフレを來すは、當然である。然らば、何故に、物資の大必要を喚起したか、物資の偏在を痛感せしめるに至つたか、と云へば、勿論、それは、再軍備の急テムポに依る。それは、また、國際對立の激化に基くのであるから、結局に於て「國際對立、遂に、金インフレを結果す」と云へる譯である。

金を増産して物資を輸入せよ

「物資と金と、どちらが、ヨリ大切か」と云ふ處まで、押詰められると、遂には、米國の如き物資國は、金の輸入を制限しないとは限らない。それは、金インフレの悪影響を遮斷する一方には、自國の物資の確保策ともなるからだ。從て、再軍備が、この調子で、依然として、持續するものである限りは、日本の如きは、ドシ／＼、産金を刺戟して、物資國に、それを現送して、物資に替へる必要がある。この點から見て、今回の産金買上値引上げは好対策であつた、と云へよう。試みに、日本の産金

状態を見ると、即ち左の如くである。

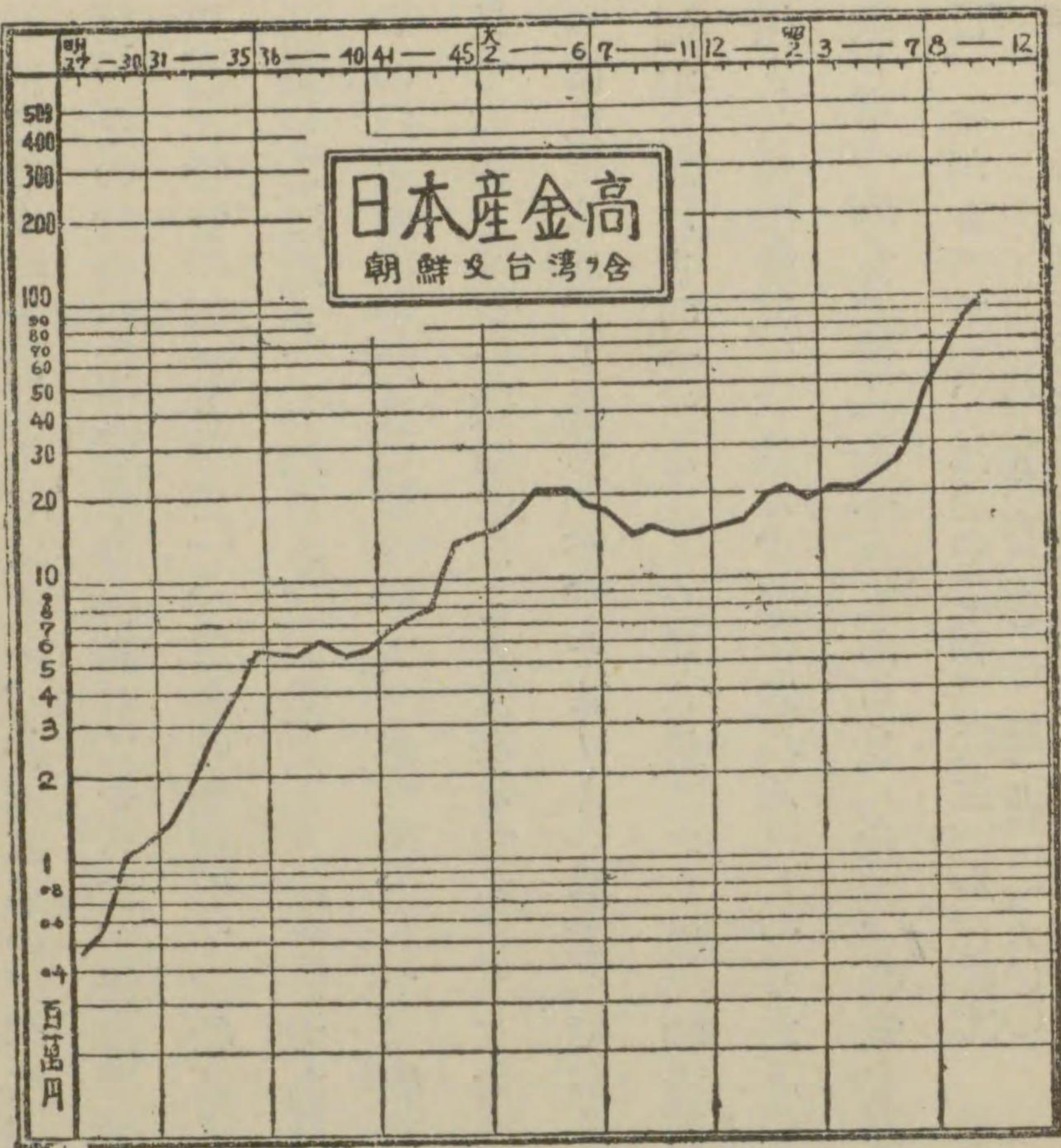
明治	内地	朝鮮	臺灣	計
七年	一七、三六七			一七、三六九
八年	四六、四三〇			四六、四三〇
九年	五九、二八〇			五九、二八〇
一〇年	九三、四二一			九三、四二一
一一年	七二、六八七			七二、六八七
一二年	六九、六八八			六九、六八八
一三年	八三、三一七			八三、三一七
一四年	八一、二一三			八一、二一三
一五年	七二、四五五			七二、四五五
一六年	八〇、一九五			八〇、一九五
一七年	七三、二三三			七三、二三三
一八年	七三、〇八五			七三、〇八五
一九年	一二三、八八八			一二三、八八八
二〇年	一三八、八三八			一三八、八三八
二一年	一六七、七八八			一六七、七八八
二二年	二〇四、五九六			二〇四、五九六
二三年	一九五、六七五			一九五、六七五
二四年	一八六、六九七			一八六、六九七
二五年	一七八、三四八			一七八、三四八

二六年	一九九、九六一			一九九、九六一
二七年	二二一、五七八			二二一、五七八
二八年	二四〇、九五六			二四〇、九五六
二九年	二五六、五一九			二五六、五一九
三〇年	二七六、四二七			二七六、四二七
三一年	三〇九、一四五			三〇九、一四五
三二年	四四六、七一六			四四六、七一六
三三年	五六六、五三五			五六六、五三五
三四年	六六〇、一五三			六六〇、一五三
三五年	七九三、五一八			七九三、五一八
三六年	八三五、八四七			八三五、八四七
三七年	七三六、一三七			七三六、一三七
三八年	八一二、七六四			八一二、七六四
三九年	七一四、五八八			七一四、五八八
四〇年	七七三、七五一			七七三、七五一
四一年	八九一、四八六			八九一、四八六
四二年	一、〇四八、五五九			一、〇四八、五五九
四三年	一、一六四、七七四			一、一六四、七七四
四四年	一、二四八、六五四			一、二四八、六五四
大正				
一年	一、三七三、一五四	一、一〇五、八七五	四四一、七六〇	二、七九六、二八九
二年	一、四七七、〇五〇	一、一五三、三七九	四四二、八六二	二、九六九、六九五
三年	一、九一六、七六三	一、四五四、四五〇	三一五、二四五	三、二四六、七四五
		一、四二五、四九一	二八八、八〇六	三、六三一、〇六〇

金インフレか金の失業か

71

四年	二、二一一、九三一	一、六三〇、六八三	四六五、九六五	四、三〇八、五七九
五年	二、一〇四、四四一	一、八五〇、四四五	四〇八、二七四	四、三六三、一六〇
六年	一、八八七、〇七二	一、四六一、一二六	四三九、二〇五	三、七八七、四〇三
七年	二、〇五一、六五二	一、三〇九、〇六七	二一六、〇六九	三、五七六、七八八
八年	一、九三八、七一	八四五、八一九	一八五、五七二	二、九七〇、一〇二
九年	二、〇五八、四〇〇	八七八、九九四	一五一、四一六	三、〇八八、八一〇
一〇年	一、九六六、五七八	七一一、九一九	二三五、一〇〇	二、九一三、五九七
一一年	二、〇〇七、一五一	八八六、八五一	一八二、三二八	三、〇七六、三三〇
一二年	二、〇五〇、九七一	一、〇四八、八九一	一一一、九八八	三、二一一、八五〇
一三年	二、〇二六、七四三	一一二、四九五	七一、七七二	三、二一一、〇一〇
一四年	二、二五六、九〇八	一二五、三四〇	六四、六二〇	三、五七二、八六八
昭和	一年	二、四二六、二八一	一九〇、九〇九	四、四一七、四九四
	二年	二、五六一、八五五	一、五〇四、六九一	四、一八八、四一五
	三年	二、七七〇、七九〇	一、三八〇、〇六三	四、二二五、六〇七
	四年	二、七七九、二八六	一、四八〇、七二五	四、二六〇、〇一一
	五年	三、二二二、六二六	一、六四九、七二〇	五、〇〇二、三七八
	六年	三、二七三、三四〇	二、四〇八、三四五	五、八二九、三九七
	七年	三、三三二、五七七	二、六四〇、一九四	六、一九〇、六五七
	八年	三、六六〇、九五七	三、〇六八、八四四	六、九〇三、七〇五
	九年	三、六六〇、九五七	三、三一四、〇二七	七、二五三、九七〇
	一〇年	四、八八五、六〇〇	三、九二二、六〇〇	九、一一六、七〇〇
	一一年	五、六三〇、四〇〇		



大正年間と比較すると、昭和十、十一年は

三倍からの激増だが、今回は、更に増大しよう。昭和十一年度を一千萬匁目と推定すると一匁目十四圓として一億四千萬圓である。恐らく、将来は、一匁目十四圓では貧乏處理の爲めに、百萬分の一、二がモノを云つて、一箇年の産金高は、二千萬匁目位にはなると見られるから、一箇年に三億圓の入超があつても、日本はやつて行ける勘定である。金より物資の大切な再軍備時代には、急ピッチで金を掘つて、それを物資に替へることだ。金を掘るには、労働力だけで事足るのだから。こ

の筆法で行けば、日本人の労働力をば、世界の物資に、金を通じて替へることになるのだ。マイダス王の二の舞をやつて、金インフレで泣くよりは、金を、物資に、ドシ／＼替へて、インフレの程度を軽くして、早く、再軍備なり、生産力擴充なり、をやつた方が賢明ではないか。

金の充實よりも物資の充實

處が、金に對する執著は、案外に、激しいもので、金を現送して、金準備を減少させると、インフレにはなりはせぬかと思ふ人が、仲々に多い。乍然、それは逆である。物資の需要が激増して居るのに、その物資の需要を十分に満してやらず、徒に、産金を國內に蓄積しようものならば、それこそ、(一)、物資の不足と、(二)、黄金の過剰とて、物品インフレの、金インフレの、兩インフレを同時に結果するに至り、それこそ、大變なことになるであらうと思ふ。物資の不足と、金の過剰は、インフレの二大原因ではないか。従て、金を現送して、物資の不足を補へば、以上の正反對で、二方面からして、インフレを豫防することになるであらう。金さへ豊富ならば、物資がどうであらうと、インフレにはならぬ、と見るのが、そも／＼の間違ひである。インフレは、物資の側と黄金の側との二つの側から起るものであることを知らねばならぬ。物資不足は、インフレの最大原因である。それは、軍擴と生産力擴充で、益々、強化されんとしつゝあるのだから、金インフレ對策から云つても、金を現送して、物資に替へるべきであらう。金は、物資を買ふ爲めにこそ必要なのであつて、物資がなくては、金があつても、無用の長物ではないか。故に、米國や英國が、金の輸入を禁止し、物資の輸出を制限しない間に、早く、ドン／＼と、金を輸出して、物資を輸入するに限る。

正貨準備の機能

正貨準備の機能も、物資の過大消費に陥ることに依つて、インフレを來すことを阻止する點にある。従て、正貨準備がなくとも、(一)、通貨を統制して、物資過大消費を來すことなからしめ、(二)、且つ、外國から物資がドン／＼輸入出來て、物資の不足にならぬやうに出來る限りは、正貨準備なんか一文もなくとも、不換紙幣國で、立派にやつて行ける。決して、インフレにはならぬものである。正貨準備は、消費過大を防止する栓の如きものだ。この栓が、これからの米國の如く、金の激増で、役に立たなくなれば、正貨準備が正貨準備たり得なくなるであらう。百%までは、正貨準備がその役目をなすであらうが、二百%三百%五百%と云ふ如き正貨準備となつては、消費過大を防止し得なくなるから、正貨準備の作用を、黄金は、果し得なくなる。それを、そのままに放置するならば、恐らく、消費物件が通貨信用數量に比較して、不足の状態となり、遂には、金インフレを結果せざるを得ないであらう、と思はれる。

金準備制度の没落

金の供給が過大になつたり、金の偏在が激化したりすると、中央銀行の金準備制の機能自體が怪し

いものになつて了ふであらう。金の不足國は、金準備過小の故を以つて、金の過剰國は、金準備の過大の故を以つて、共に、金準備制の機能を喪失するに至るであらう。斯くて、遂に、金準備制は、國內的に不用と化し、金準備は、爲替平衡資金と化し、金の蓄積は、爲替決済の爲めに、爲替勘定でなされ、通貨制度勘定でなされなくなつて然るべきである。正貨準備なんて餘分な考へのある爲めに、黄金の乏して國も、過大な國も、共に、悩まされるに至るのであるから、先づ、考へられるのは、金準備制の没落である。金準備制度廢止が一番の對策。

金問題の内容

「金」の問題が、問題として登場したのは、(一)、最初は、共産主義者の金共同便所論であり、(二)次いで、金本位の崩壊で、金が無價値になりはせぬか。との議論に於てである。(三)、更に、第三回目は、金の増産に依る金供給過剰問題である。即ち、「共産主義と金」「金本位と金」「金の供給過剰と金の將來」等が、金の問題の内容とされた。それに、インフレ・デフレの問題や、物價平準騰落の問題や、金利の問題や、世界新通貨制度建設の問題、さては、世界經濟機構の改造、乃至、再建の問題、或は、金分配の平等化の問題等々の諸問題が、問題となつて登場したのである。故に、金問題は經濟問題の一大中心を爲すの觀がある。

金に對する共産主義理論

共産主義の理論から行くと、金なくしては、貨幣はないのであるから、貨幣經濟が廢棄されるれば、金は無用の長物と化して、金の共同便所も、出來上る譯である。その代りに、貨幣經濟である限り、金は絶對の必要物であつて、金の缺乏は、即ち、貨幣經濟の破壊である。悪性インフレか恐慌かを、金の缺乏は、誘發する、と云ふ點から見て。笠信太郎氏は、その著「金・貨幣・信用」に於て、貨幣と紙幣の區別を論じ、「貨幣即ち紙幣であると云ふテーゼが、貨幣無價値論の實踐的な進出の第一歩を踏み出して居る」のであると考へ、貨幣なくして、紙幣のみでは、インフレーションになる外なし、と見る。「紙幣とは、金の標章であり、貨幣の標章である。貨幣は、即ち金である。紙幣は金の標章である。従て、「金の必要流通量を越えて、紙幣が増發されるれば、紙幣の代表する價値は、その紙幣量の膨脹に反比例して、下落するであらう」と云ふ。共産主義理論家は、一般に、「貨幣≡金」であるが、「紙幣は貨幣に非ず」と見る。従て、金なければ、貨幣なく、従て、金も、貨幣もない不換紙幣の下では、インフレーションが起り易い、と見るのである。

笠信太郎氏の所論

斯くて、共産主義理論からすると、資本主義と金との関係は、極めて、密接なるものとなる。それは、共産主義の下で、金の共同便所が成立するが如くだ。金の性質を斯く見て來ると、金本位の崩壊なることは、資本主義の下では、絶對的にあり得ないこととなる。資本主義、即ち、金本位なるが故に。笠氏は現に云ふ。「日本においても、イギリスにおいても、圓やポンドは、直接に、金の一定量目たることをやめた。わが貨幣法第二條は廢止されたわけではないが、兌換の停止によつて、それは有名無實となつた。即ち、圓は、一定の金屬重量を表はすものとしての價格の標準たることをやめた。けれども、價値の尺度は、兌換停止の日本において依然として金だ。百圓が現在三十五ドルだとすれば、それは、現實に金二十匁の約款を示して居り、そのかぎり、圓は價値尺度たる金につながつて居る。かくて、金本位を停止せる一切の國の貨幣が減價せる姿においてではあるが、みな悉く、價値尺度たる金につながつて居る。金本位が崩壊したと見る人々は、抽象的孤立的に、一國幣制の法律的外觀のみを見、そして支拂手段が、建前において、紙に變じたことのみを見るが、この紙が、たとへ、額面の7/10にしる、價値をもつのは、その背後に金があるからだといふことを見ない」(金・貨幣・紙幣一七二頁)と。斯くて、資本主義の存する限り、金本位も存するのだから、各國が、金禁止をやつた處で、決して、金の重要性は減少しない。却つて信用の缺乏を、金が代理せんとするからして、金の需重と金の爭奪は激化するのみだ、と見る。

金の二問題

「金本位がなくなつても、金の重要性は残る」と見る人々は、慥に、金本位の變化を、金本位そのものの消滅と、混同したものであらう。金本位がなくなれば、金の重要性もなくなる筈だ。だが、そんな金本位の消滅なんてことが、資本主義の下であり得ることかどうか。共産主義論では、それは、頭から否定されるが、所謂、「紙幣論者」の一群は、金本位のなき資本主義の可能性を考へるであらう。蓋し、信用券が「貨幣(金)の代用を、立派にやるからと、の理由の下に。これを、更に、徹底せしめると、資本主義の下ですら、金の共同便所が建つことになるであらう。然らば、この點はどうか。ブルジョワは、貨幣の根本を「信用」に求めるが、共産主義は、貨幣の根本を、商品性の結晶たる「金」に求める。その孰れが正しいか。

金本位は環境論で

これは、環境論でなさるべきものであつて、本質論の範圍を超える。蓋し、世界が、一つの國家に統合されるならば、金本位なき資本主義が成立するし、世界が、數箇國に分れて、對立して居れば、金本位なき資本主義は成立しないからである。再禁止に依つて、金本位は、國內的に消失したが、國

際的には、今日、依然として、金本位は存するのである。従て、金本位の崩壊は、國內的には云へるが、國際的には云へない。従て、金本位なき資本主義、従てまた、金の必要な資本主義は考へられるのであるが、然し、今日の國際關係では、考へられないのである。即ち、資本主義と金本位とは、本質的に不可分なものでなくして、環境的に不可分なのだ。今日の環境では、資本主義と金本位とは不可分だ、と云へるのみ。

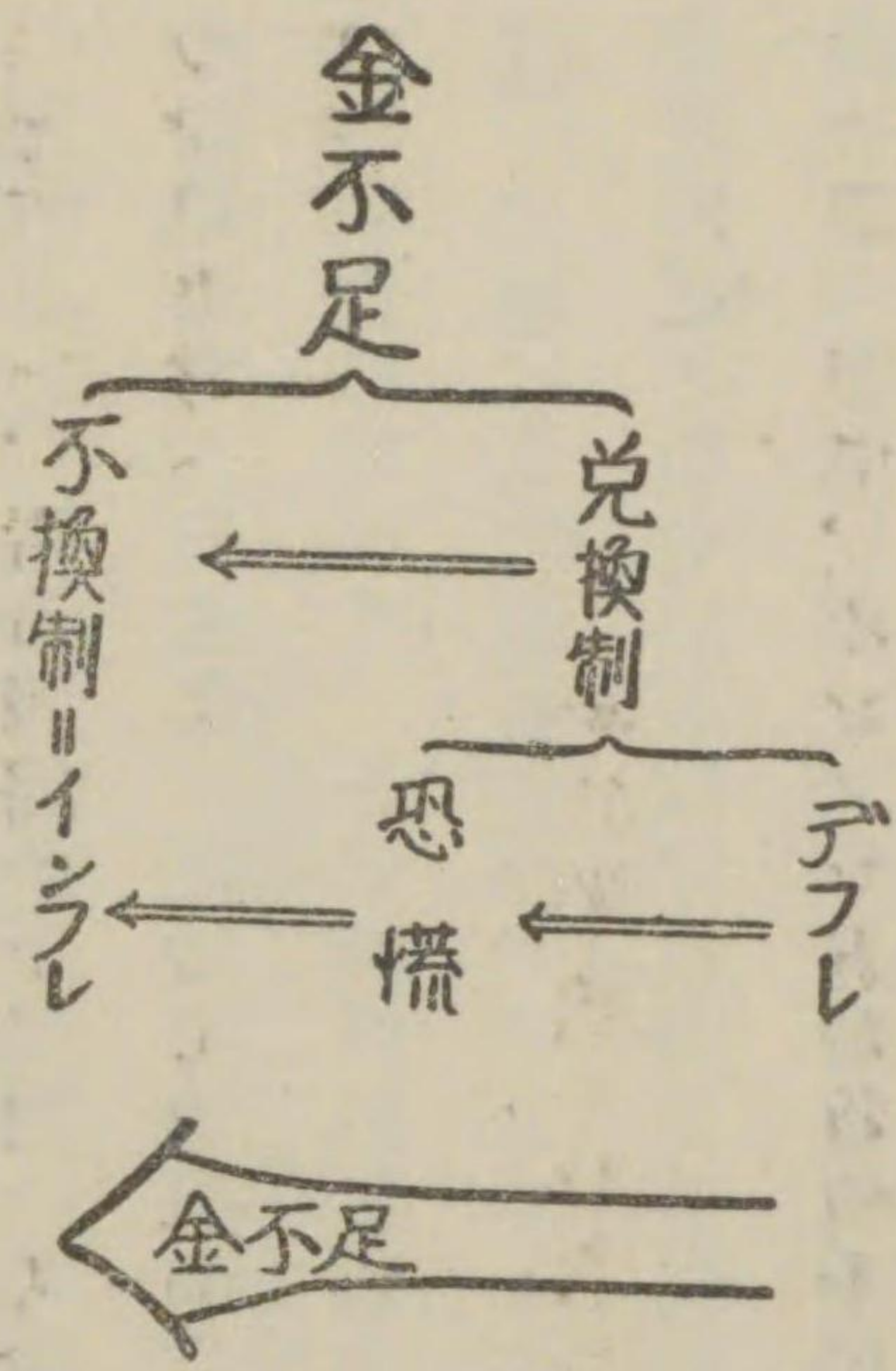
環境論から見た金本位

金本位とは、金を貨幣の基礎とする意味である。信用券本位の逆である。信用券本位は、純然たる不換紙幣制度であつて、この下では、通貨數量の調節は、國家が、適當に、物價政策、金融政策を考慮して行ふであらう。従て、統制經濟である。不換紙幣制度で、資本主義をやつて行くのには、消費過大となり、消費物件の不足を來さしめない様に爲めに、通貨統制が必要となる。金本位制ならば、金の存在量なり、金の移動なりが、自然と、通貨數量を調節して、消費過大をチェックするから良いが、不換紙幣制の下では、人間が、人爲的に、意識的に、それをやらねばならぬ。只、それだけの相違があるのみである。資本主義は、絶対に、金本位なしでは、不可能だ、と云ふ譯のものではない。環境が許し、通貨統制が人爲的に巧く行くものとすれば、不換紙幣制でも、充分に資本主義はやつて行けるのである。乍然、今日の處では、第一、環境が許さないし、通貨統制も何となく、覺束ないからして、純然たる不換紙幣の資本主義は、恐慌かインフレに陥りさうで、頗る劍呑な氣がするのである、従て、實際問題としては、世界各國が金本位から解放され、金の必要が、通貨的に消失するであらうことは、殆んど考へられないのである。通貨の基礎には、必ずや、「金」(Gold)が豫想されるであらう。世界の資本主義は、仲々、ゴールドから解放されない。

金不足の經濟的影響

とすると、斯る状態の下に於いて金の供給過剰が起つて來たらば、一體、どうなるであらうか。この問題を考へる前に、極めて抽象的ではあるが、金の供給不足の場合と、金の供給過剰の場合との二つの場合に就いて、その經濟的影響を考へる必要がある。先づ、金の供給が不足するとどうなるか。直ちに考へられることは、デフレーションである。乍然、極度に、金が不足して來れば、デフレーションは恐慌となり、それを救済する爲めに、通貨が激發するからして、物品に比較して通貨の方が、激増する。従て、インフレとなる。金の數量の制限を無視して通貨を激發するとすれば、通貨の統制が困難となり、消費物件に比して、遙かに、多くの通貨を増發し、消費過大を來す點から見て、インフレーションを誘發するであらう。金準備の過少が、インフレーションを來す譯ではなく、金準備を無視

する様な、通貨の増發は、統制が困難で、消費過大、消費物件不足を誘發し易いからして、インフレを來し易いのである。何れにしても、金準備が不足するにつれて、デフレは恐慌となり、恐慌は、遂



に、インフレとなる傾向がある。但し、夫れは、兌換制度の場合である。不換制度の今日では、金準備の不足は、必ずしも、デフレや恐慌を來さないで、却つて、初めから、インフレ的情勢を來す可能性が多いのである。之を、更に、他言すれば上圖の如くなるのであらう。

金の不足が激化して、恐慌來とならば、大救済の爲めに兌換制を不換制にせねばならぬ。でないと、通貨の思ひ切つた増發は出來ないからだ。乍然、その結果は、通貨統制力が鈍り、通貨統制が怪しくなるからして、インフレ的傾向を來すのである。

金供給過剰の經濟的影響

次に、然らば、金の供給が過剰すればどうであるか。それをそのまま放任すれば、歐洲大戰後の日米兩財界に於て經驗せる如く、インフレーションを來す。金の流入の爲めに、通貨が増發されて、金インフレを來すのである。今日の米國にしても、自然に放任するならば、金インフレになる外ない。

金の供給が過剰する場合には、兌換制であらうと、不換制であらうと、共に等しく、インフレーションを來す。米國が、若しも、この金インフレを回避せんが爲めに、金買上値の引下げをやつたらばどうか。その際には、世界各國の金買上値が、米國と歩調を一にして引下げられぬ限り、米國の弗は騰

自由放任 ↓ 金インフレ

金過剰

金價引下 ↓ 不況恐慌

貴するから、圓は弗に對して下落するであらう。一オンス三十五弗の今の金價格をば、一オンス十七弗五十仙まで引下げらば、日米爲替相場は十四弗五十仙まで激落する勘定になるのである。その結果として、米國の財界は、商品の輸出

不振で、大恐慌に陥るであらう。故に、米國は、金インフレか恐慌かの二途孰れかを選ばざるを得ないことになる。これが、金供給過剰の兩極端である。従て、之を表記して示めせば、上の如くなるであらう。

金の米國への集中とその對策

今日、問題なのは、世界が物資不足國と、物資豊富國となり、物資不足國では、盛に、金價格を引上げて、金の現送を、物資豊富國に向つて行ひ、物資豊富國からして、物資を輸入せんとする。その結果として、遂に、物資と生産力の大なる國には、何時しか、世界の金が集合し、偏在するであら

7
1

うことだ。これが、金の増産と相待つて、一部の國々に、金の大過剰を結果せしめるであらう。昔は生産力と物資の不足が、大して感ぜられなかつたから良かつたのだが、最近では、世界各國の再軍備運動、從て、生産力擴充、不生産的大消費の爲めに、物資と生産力の比較的に缺乏せる國々では、金價格を引上げて、産金高を増加し、金を原料なり生産設備なりに變へざるを得ないのである。即ち、再軍備の爲めに、物資と生産力の不平均を來した。その爲めに、金の偏在を來すのである。この金の偏在は、産金額の増大につれて、益々、激化する。そして、金の供給過剰をば、米國又は植民地國に齎すであらう。斯る金の偏在を防止するには、米國としては、思ひ切つた、大幅の金價格引下げをやらねばならぬ。それに依つて生産力と物資の不足せる國々が、米國の物資や、生産力をば、金で買ふことを不利ならしめるより外はない。然し、そんなことをすれば、米國內の物資と生産力の過剰を來して、恐慌となるだらう。と云つて、この恐慌が嫌やさに、物資や生産財を、金に對して輸出して居れば、金の大集中大偏在からして、例の金インフレーションとならざるを得ないだらう。爲政者としては、恐慌よりはインフレの方を歓迎するからして、米國としては、金インフレに陥る可能性の方が、恐慌になる可能性よりも、多いのである。

金の世界的動き

今迄は、まだ大したことはないにしても、今日の情勢で、この二・三年間を経れば、慥に、金の供給過剰が、米國に於ては「金インフレか恐慌か」の一大岐路を作ると思はれる。見よ。

(千ファイン・オンズ)

	一九二九年	一九三一年	一九三六年	一九二九年	一九三一年	一九三六年
南阿	一九二九年	一九三一年	一九三六年	一九二九年	一九三一年	一九三六年
ロシ	一〇、四二二	一一、三四〇		三四	二八	七四
カナ	一、〇八五	七、三五六				
米	一、九二八	三、七二〇		一三八	一四五	三二二
米	二、〇五七	三、七三四		七九	一二九	七七
濠洲	四二七	一、一六〇		二六	一一	〇・八
其	三、六七七	七、七一〇		九	一七	一四
合	一九、五六八	三五、〇〇〇		二九	二一	一九
イギリス(磅)	一九二九年	一九三一年	一九三六年	一九二九年	一九三一年	一九三六年
アメリカ(弗)	一四六	一二一	三一四	三四	二八	七四
フランス(法)	二、八五七	二、九八八	一一、二五一	一三八	一四五	三二二
ドイツ(麻)	四一、六六八	六八、四八一	六〇、三五九	七九	一二九	七七
オランダ(盾)	二、二六五	九八五	六六	二六	一一	〇・八
ベルギー(ベルグ)	四四七	八八七	七二〇	九	一七	一四
スイス(瑞法)	一、一七五	二、五五三	三、七三六	八	一七	二一
計	五八一	二、二九九	二、六八三	五	二一	一九
金インフレか金の失業か				二九九	三六八	五二八
				二四五		

右表の如く、一九二九年には、一千九百萬オンスのものが、一九三六年には三千五百萬オンスと約八割方の激増ではないか。處が、その中で、金の増加せる國は英米二箇國である。英國は、三千四百萬オンスから七千四百萬オンスとなり、米國は、一億三千八百萬オンスから三億二千二百萬オンスとなり、共に、二・三倍の激増であるが、フランス、ドイツは、共に、金保有高の減少を示して居るのである。故に、産金増大と金偏在の情勢とが判らう。これは、各國の金價格引上げで、今後は、年と共に、激化する外ない。産金増大率にしても、金偏在率にしても。況んや、ロシアの産金増大と、ロシアが、産金を、英國市場に、ドシ／＼賣却するに於てをやだ。見よ。ロシアの金生産高は、一九三五年には、五百六十五萬オンスであり、南阿の生産高の半分よりも多い。一オンス七磅とすると四千萬磅である。一磅十七圓とすると六億八千萬圓である。恐らく、これは年と共に増大するだらう。これに、更に、東洋よりの死藏金の輸出がある。一九三一年から三五年に互る五箇年間に、三千七百萬オンスであつたものが、一九三五年中には、約五百萬オンスに上つて居る。これに、ロシアの金生産高五百六十五萬オンス、更に、ロシア以外の金生産高二千七百萬オンスを加へたる三千七百萬オンスの金が、世界、否、英米二箇國に向つて注がれるのである。この三千七百萬オンスは、世界の金在高の實に5%に當つて居る。斯くも巨額な金の供給が増大するわけだが、夫れは、英米二箇國に向つてなされる。一九三六年、一九三七年、一九三八年と、年毎に、その供給高、その偏在高は、激増するであらう。一九三五年に就て見ると、佛、伊、瑞、西、和蘭の四國は合計三億三千萬磅の巨額の金を失つた。その失はれた金は、主として、英米に集中されたのである。

ケインズの所論果して云當か

その結果は、どうなるか。ケインズは、ロンドン、エコノミック・ジャーナル九月號に於て、「金が豊富に供給されるれば、永い目で見れば、結局、金利の低下に影響しないでは措かぬ。物價は徐々に確りした足どりで騰貴するであらう。其の理由は、一部分は、生産の増加につれて、平常的利潤が恢復する結果として、他の一部分は、利潤増加に伴ふ賃銀上騰を阻止する力の缺けて居ることに依つて。斯くて、歴史の運命は、皮肉なもので、共產主義者の金の産出が效を奏して、資本主義制度を尙ほ暫く維持して行くのに役立つことにならうとは」と云つて居るのであるが、果して、こんな都合の良いことになるであらうか。金インフレーションとなり、夫れは、一轉して、遂には、恐慌となり、資本主義經濟の大動搖を結果するに至らぬであらうか。

エコノミスト誌の金問題論

そこで、エコノミスト誌の如きは、「金の將來」(The future of gold)の見出しの下に論じて曰く、

「需要よりも供給が遙かに超過する事態を是正する簡單明瞭な方法は、英米の如き金偏在國が、金の買値を引下げるか、無制限に買入れることを拒絶するかである。然し、今日、金に對してこの種の方法を採る事は、極めて困難な事情が多々ある。世界の輿論は、未だ金インフレの危険、乃至、切迫をハッキリ認識してゐない。又、金の偏在が現存する限り、金の不足國をして、この手段の必要を了承せしむる事も、不可能である。更に、金が爲替資金の内に陰蔽されてゐる限り、又、世界を通じて、統一的の銀行制度が採用されぬ限り、金インフレに對する世界各國の共同動作は、實現の見込みがない。又、強ひて實行すれば、豫期せざる結果を生ずるであらう。且つ、輿論は、金の價格引下げを以つてデフレ的行動なりとし、財界に及ぼす反動は痛烈であらう。理想の世界ならば、今日の如きは、當然、金價の引下げ、或は、生産統制をやるべき時である。然し、現實の世界では、これは、全く、實行不能である」と云つて居るのである。

インフレーション來りなば 終

昭和十二年六月廿二日 第一刷印刷
昭和十二年六月廿七日 第一刷發行

『インフレーション來りなば』

定價壹圓五拾錢

著者 勝田貞次

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

發行者 神田龍一

東京市牛込區矢來町三六

印刷者 本間十三郎

東京市牛込區矢來町三六

印刷所 清揚社

秋社

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

柏館

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

振替東京三九七一六

發行所 春松
發賣所 株式會社



7
1

日本コンツェルン全書

全十二卷

一册一圓五十錢

菊判特製平均三五〇頁
送料市内六錢其の他十四錢

切實な時代の興望を擔つて、日本コンツェルン全書は生れた。

財閥の名は、コンツェルンと今書替へられなければならぬ。日本資本主義の中樞は、三井、三菱を双壁とする新舊十八箇のコンツェルンである。彼等の動向は日本の明日の運命を支配する。百廿億の資本、千餘の統轄會社、數百名の支配者、百數十萬のインテリ従業員、物と人とブレインのこの結合、配置、編制、動員、これが日本の社會を、經濟を、又歴史を左右するのだ。この財閥とは果して何であるか？日本コンツェルン全書は、この大きな深い疑問に答へたものだ。執筆者は總て現下經濟評論界に鳴る精銳が年餘に互る調査と研究の結晶、その對象は嵐の中に立つ各コンツェルンの全面的分析である。

第五回
配本

日本産コンツェルン讀本

和田日出吉著

以下毎月刊行の分

日本財閥論……………高橋龜吉	住友コンツェルン讀本……………西野喜與作	安田コンツェルン讀本……………小汀利得	證券財閥讀本……………栗林正修	澁川・古河野讀本……………西野入愛一	大倉・川津讀本……………勝田貞次	鴻池・根津讀本……………鈴木茂三郎	財界人物讀本……………鈴木茂三郎
----------------	----------------------	---------------------	-----------------	--------------------	------------------	-------------------	------------------

第一回(配本濟)

三井コンツェルン讀本

和田日出吉著

第二回(配本濟)

滿鐵コンツェルン讀本

小島精一著

第三回(配本濟)

三菱コンツェルン讀本

岩井良太郎著

第四回(配本濟)

新興コンツェルン讀本

三宅晴輝著

73
12

732
126

6.28

7
1

732
126

